

平成 29 年度全国学力・学習状況調査の結果概要

～千歳市立小中学校における調査結果～

千歳市教育委員会

1 調査の概要

(1) 調査の目的

- 義務教育の機会均等とその水準の維持向上の観点から、全国的な児童生徒の学力や学習状況を把握・分析し、教育施策の成果と課題を検証し、その改善を図る。
- 学校における児童生徒への教育指導の充実や学習状況の改善等に役立てる。
- 以上のような取組を通じて、教育に関する継続的な検証改善サイクルを確立する。

(2) 調査の対象学年

- 小学校、義務教育学校前期課程、特別支援学校小学部の第6学年の児童
- 中学校、義務教育学校後期課程、中等教育学校、特別支援学校中学部の第3学年の生徒

(3) 調査の内容

- ①教科に関する調査（国語、算数・数学）
 - ・主として「知識」に関する問題（A）
 - ・主として「活用」に関する問題（B）
- ②生活習慣や学習環境等に関する質問紙調査
 - ・児童生徒に対する調査（児童生徒質問紙調査）
 - ・学校に対する調査（学校質問紙調査）

(4) 調査の方式

悉皆調査

(5) 調査の実施日

平成29年 4月18日（火）

(6) 本市における調査実施学校数及び児童生徒数

小学校 16校 868名 中学校 8校 885名

※北進小中学校を除く市内学校

2 教科に関する調査結果

(北海道教育委員会の分類方法による9段階)

相当高い	・・・	7ポイント以上	ほぼ同様(下位)	・・・	-1ポイント以下-3ポイント未満
高い	・・・	5ポイント以上7ポイント未満	やや低い	・・・	-3ポイント以下-5ポイント未満
やや高い	・・・	3ポイント以上5ポイント未満	低い	・・・	-5ポイント以下-7ポイント未満
ほぼ同様(上位)	・・・	1ポイント以上3ポイント未満	相当低い	・・・	-7ポイント以下
同様	・・・	±1ポイント			

(1) 小学校教科全体 ()は、国から提供されたデータをもとに道教委、千歳市が独自に算出した小数値

小学校教科全体		国語A	国語B	算数A	算数B
平均正答数	千歳市	11.0 問/15 問	4.9 問/9 問	12.1 問/15 問	4.8 問/11 問
	全 道	11.1 問/15 問	5.1 問/9 問	11.6 問/15 問	4.8 問/11 問
	全 国	11.2 問/15 問	5.2 問/9 問	11.8 問/15 問	5.1 問/11 問
平均正答率	千歳市	73%(73.3%)	55%(55.0%)	81%(80.7%)	44%(43.6%)
	全 道	74%(73.7%)	56%(56.3%)	77%(77.3%)	44%(43.5%)
	全 国	74.8%	57.5%	78.6%	45.9%
全道との比較		同様	ほぼ同様(下位)	やや高い	同様
全国との比較		ほぼ同様(下位)	ほぼ同様(下位)	ほぼ同様(上位)	ほぼ同様(下位)

算数Aは、大幅な伸びが見られ、全国を上回った。

算数Bは、全国との差を縮め全国とほぼ同様という結果であった。

算数A及び算数Bでは、習熟度別少人数指導やICT機器を活用した授業改善の成果が見られる。

国語A、国語Bは、ともに全国との差が縮まったが、「読むこと」に課題が見られ、全国とほぼ同様という結果であった。

算数Aについては、昨年度の平均正答率(以下「正答率」という)を大幅に上回り、全国を2.1ポイント上回った。領域別では、「数と計算」領域の正答率の伸びが大きく全国を3.8ポイント上回った。

また、全国の下位約25%に含まれる児童の割合(以下「下位層」という)が全国を4.1ポイント少なく、全国の上位約25%に含まれる児童の割合(以下「上位層」という)は全国より多かった。

算数Bについては、全国との正答率の差が昨年度より2.5ポイント縮まり、全国と「ほぼ同様」となった。また、下位層の割合については、全国との差を1.5ポイント縮め、全国とほぼ同様の水準となっている。

このように、算数Aの正答率が大幅に伸び全国を上回り、算数A及び算数Bにおいて下位層が減少するなど、学習支援員を活用した習熟度別少人数指導による習熟の程度に応じたきめ細かな指導やICT機器を活用した授業改善の成果が見られる。

国語Aについては、昨年度と同じく全国との比較区分は「ほぼ同様」であったが、全国との正答率の差は-1.5ポイント(昨年度-2.1ポイント)に縮まった。領域別では、「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」の正答率が最も高く、全国と同様であった。

国語Bについては、全国の正答率の差を2.5ポイントに縮め(昨年度-5.1ポイント)昨年度の「低い」から「ほぼ同様」となった。領域別では、「話すこと・聞くこと」の伸びが大きく、全国を上回る正答率であった。

デジタル教科書を活用した授業は、国語科でも日常的に行われており、「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」の領域でその効果が見られる。今後も授業改善の一つのツールとして活用の幅を広げ、国語科の学力の向上が図られることが期待される。

(2) 中学校教科全体

()は、国から提供されたデータをもとに道教委、千歳市が独自に算出した小数値

中学校教科全体		国語 A	国語 B	数学 A	数学 B
平均正答数	千歳市	23.9 問/32 問	6.3 問/9 問	22.1 問/36 問	6.8 問/15 問
	全 道	24.5 問/32 問	6.5 問/9 問	22.9 問/36 問	7.0 問/15 問
	全 国	24.8 問/32 問	6.5 問/9 問	23.3 問/36 問	7.2 問/15 問
平均正答率	千歳市	75%(74.6%)	69%(69.5%)	61%(61.4%)	45%(45.1%)
	全 道	77%(76.7%)	72%(71.7%)	64%(63.7%)	47%(46.9%)
	全 国	77.4%	72.2%	64.6%	48.1%
全道との比較		ほぼ同様 (下位)	ほぼ同様 (下位)	ほぼ同様 (下位)	ほぼ同様 (下位)
全国との比較		ほぼ同様 (下位)	ほぼ同様 (下位)	やや低い	やや低い

国語 A は、全国との差は前年度と同様で、全国と「ほぼ同様」という結果であった。

国語 B は、全国との差が縮まり、全国より「やや低い」から「ほぼ同様」となった。

数学 A は、全国との差が拡大し、全国と「ほぼ同様」から「やや低い」となった。

数学 B は、全国との差が前年度と同様で、全国より「やや低い」という結果であった。

国語 A については、全国の正答率との差が－2.8 ポイント（昨年度－2.8 ポイント）と昨年度と変わらず全国との比較区分は「ほぼ同様」であった。領域別では、「話すこと・書くこと」の領域は、がわずかではあるが、全国との差が縮まったが、「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」については、3 年連続前年度を下回っており低下傾向が続いている。この領域の学習内容は、国語の学習の基盤となるものであり、言葉の特徴やきまり、漢字に関する知識を確実に身に付けさせていくことが重要な課題である。

国語 B については、全国の正答率の差を昨年度の－4.9 ポイントから－2.7 ポイントに縮め、回復の兆しが見られる。領域別では、「読むこと」「書くこと」が前年度を上回り、書くことの能力の向上に伴い記述式問題の正答率の向上も見られる。

数学 A については、平成 26 年度以降 4 年間大きな変化は見られず、全国より「やや低い」状況が続いている。四領域中二領域が前年度を上回ると、他の二領域が前年度を下回るということが繰り返されており、四領域の学習内容をバランスよく身に付けさせることに課題が見られる。

また、整式の計算や方程式などに関する知識や技能が身に付いていない下位層の割合が全国より多い状況が続いており、小学校における習熟度別少人数指導を参考に、習熟の程度に応じたきめ細かな指導や補充的な学習の充実を図る必要がある。

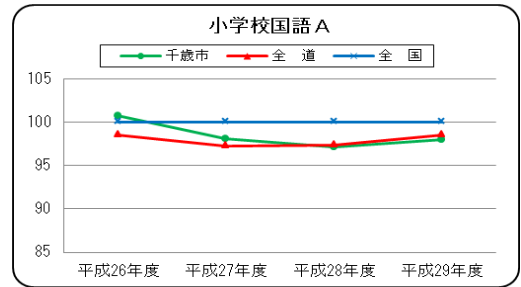
数学 B については、「図形」と「資料の活用」領域は前年度の正答率を上回ったが、「数と計算」「関数」が前年度を下回ったため、全国との差は縮まらず、全国より「やや低い」という結果であった。

数学 B では、記述式問題が 5 問出題されたが、5 問中 4 問の正答率が 10% 台と低く、数学的に思考し、数や式、記号、言葉などを用いて論理的に説明することに課題が見られる。

(3) 小学校国語 A (主として「知識」に関する問題)

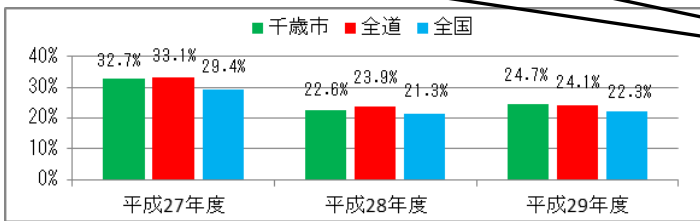
【平均正答率】 上段：平均正答率、下段：全国平均を 100 とした指数

	平成 26 年度	平成 27 年度	平成 28 年度	平成 29 年度
千 歳 市	73.4 100.7	68.7 98.1	70.8 97.1	73.3 98.0
全 道	71.8 98.5	68.1 97.3	71.0 97.4	73.7 98.5
全 国	72.9 100	70.0 100	72.9 100	74.8 100

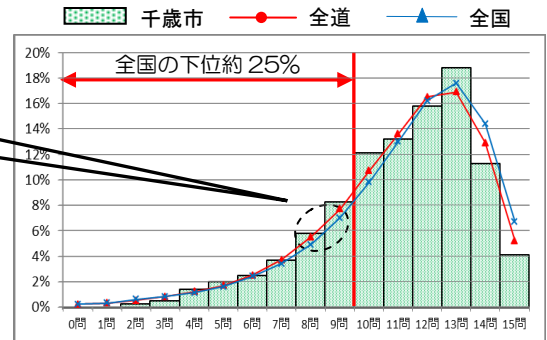


【全国の下位 25%と同じ正答率の範囲に含まれる児童の割合】

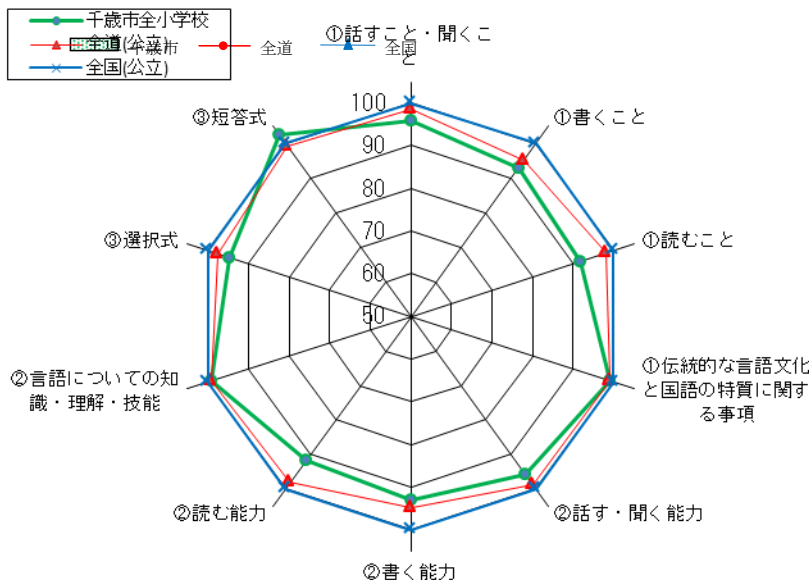
全国の下位約 25%の境界線に位置する正答数 8 問及び 9 問の児童の割合が全国より多く、この段階の児童の割合を少なくすることが課題である。



【正 答 数 分 布】



【区分別集計結果と領域別正答率の経年変化】

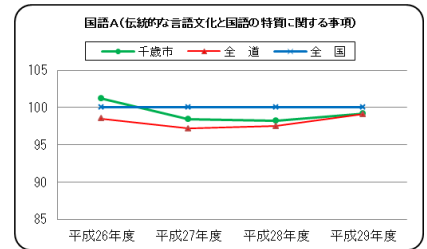
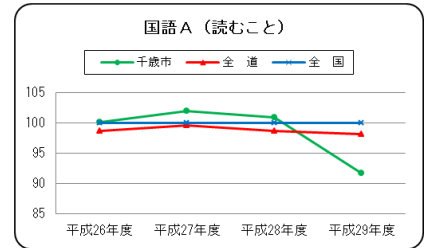
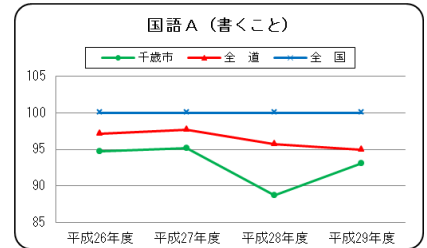
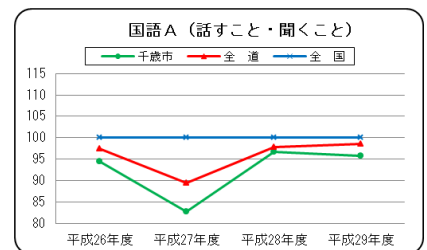


【レーダーチャートの各項目について】
「①」は学習指導要領の項目「②」は評価の観点 「③」は問題形式

「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」については、全国と同様であるが、「読むこと」については、低下傾向が見られる。

「読むこと」については、3 年連続全国の正答率を上回っていたが、今年度は全国平均を大幅に下回った。「話すこと・聞くこと」については、昨年と同じく問題数は 1 問であったが全国とほぼ同様の正答率であった。「書くこと」については、回復が見られるものの、依然として全国との差が大きい状況が続いている。「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」の領域の問題は 11 問出題され、漢字の読み、書きについては、6 問中 4 問が全国の正答率を上回っており、領域全体の正答率を引き上げる要因となっている。

今後、低下傾向が見られる「読むこと」を重点に、目的に応じて、中心となる語や文を捉え、必要な情報を見つけて読む能力を伸ばしていくことが必要である。



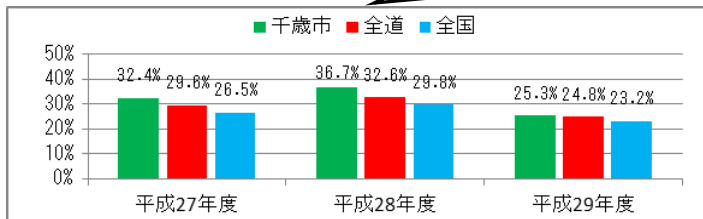
(4) 小学校国語B (主として「活用」に関する問題)

【平均正答率】 上段：平均正答率、下段：全国平均を100とした指数

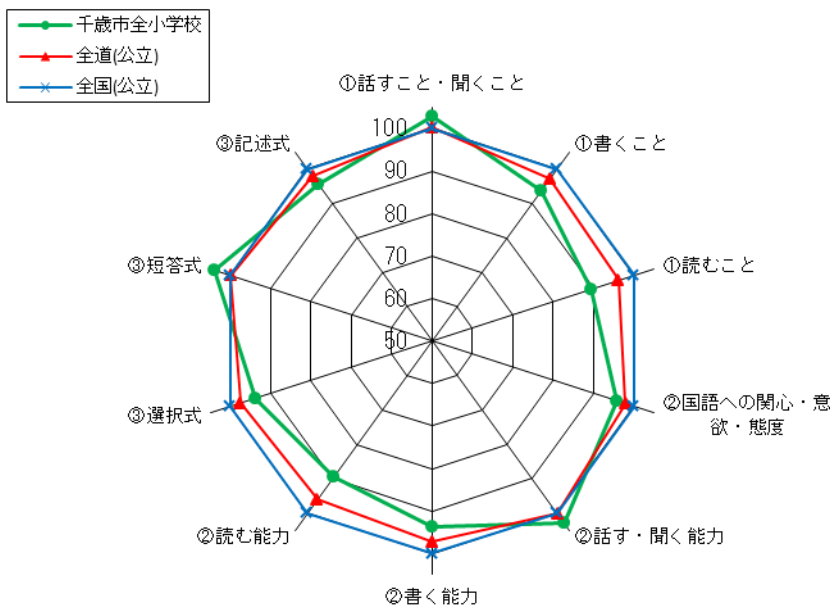
	平成26年度	平成27年度	平成28年度	平成29年度
千歳市	51.4 92.6	60.3 92.2	52.7 91.2	55.0 95.7
全道	52.9 95.3	63.0 96.3	56.0 96.9	56.3 97.9
全国	55.5 100	65.4 100	57.8 100	57.5 100

【全国の下位25%と同じ正答率の範囲に含まれる児童の割合】

下位層の割合については、全国との差が2.1ポイントと大幅に縮まったが、上位層の割合は、全国に比べて少ない状況が見られる。



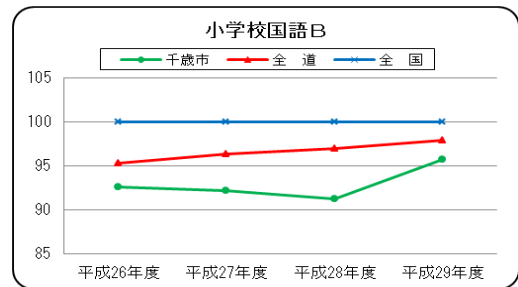
【区別集計結果と領域別正答率の経年変化】



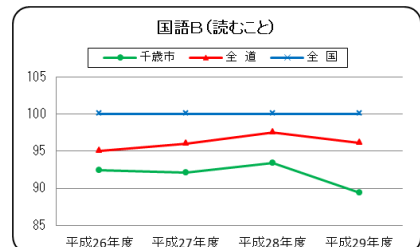
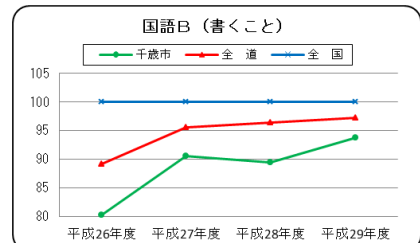
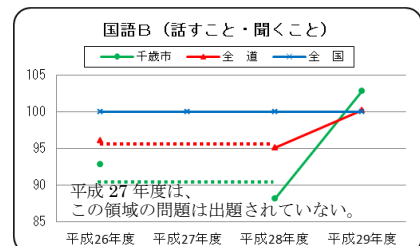
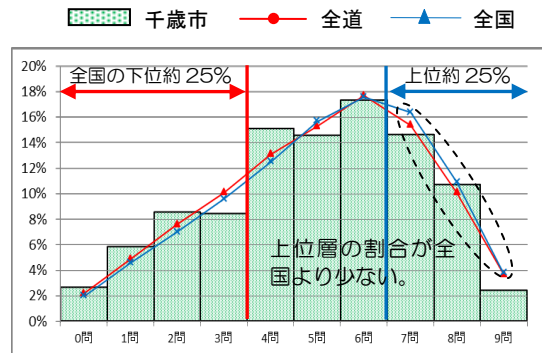
「話すこと・聞くこと」は、全国を上回り、「書くこと」についても全国との差が縮まったが、「読むこと」は、国語Aと同様に全国との差が広がった。

「話すこと・聞くこと」の問題は3問出題されたが、全国平均を上回り改善の兆しが見られる。千歳市の課題であった「書くこと」についても、全国との差が縮小し改善の兆しが見られる。一方、「読むこと」については、国語Aと同様に全国との差が広がり、特に、物語を読み、叙述を基に理由を明確にして自分の考えをまとめることに課題が見られた。

今後、場面の展開に沿って読みながら、感動やユーモア、安らぎなどを生み出す優れた叙述に着目して自分の考えをまとめ、記述することができるよう、「読むこと」と「書くこと」の指導を一体的に行っていく必要がある。



【正答数分布】



「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」の領域の問題は、平成27年度、平成28年度、平成29年度の3年間出題されていないので経年変化グラフは掲載していません。

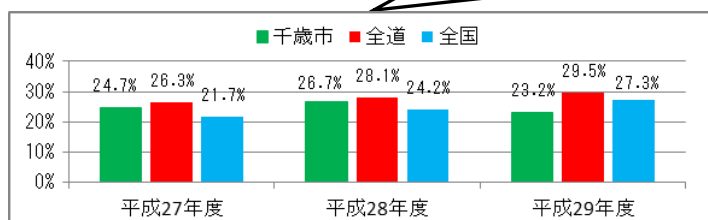
(5) 小学校算数A (主として「知識」に関する問題)

【平均正答率】 上段：平均正答率、下段：全国平均を 100 とした指数

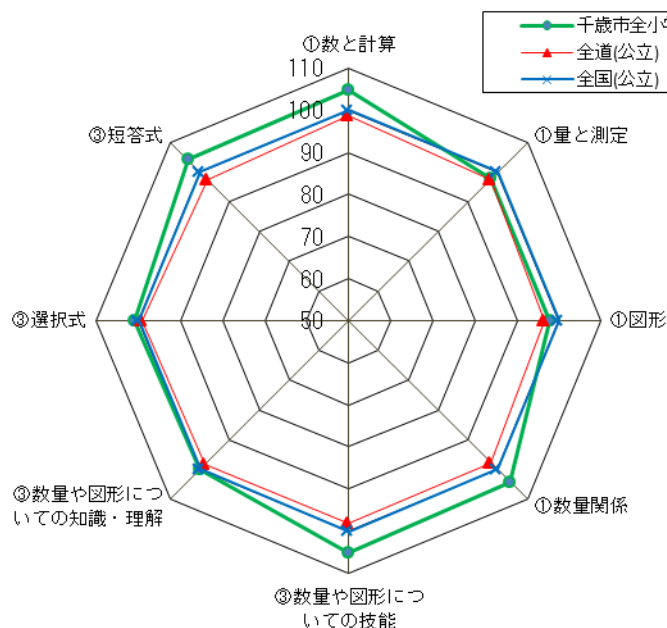
	平成 26 年度	平成 27 年度	平成 28 年度	平成 29 年度
千 歳 市	75.7 96.9	72.5 96.4	75.8 97.7	80.7 102.7
全 道	75.8 97.1	72.3 96.1	75.3 97.0	77.3 98.3
全 国	78.1 100	75.2 100	77.6 100	78.6 100

【全国の下位 25%と同じ正答率の範囲に含まれる児童の割合】

下位層の割合は全国を下回り、上位層の割合は全国を上回っている。



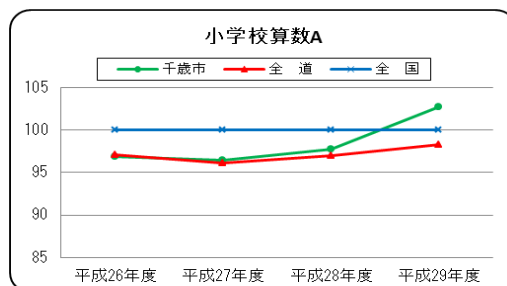
【区別集計結果と領域別正答率の経年変化】



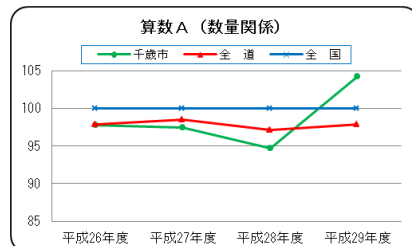
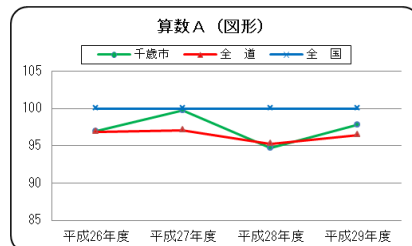
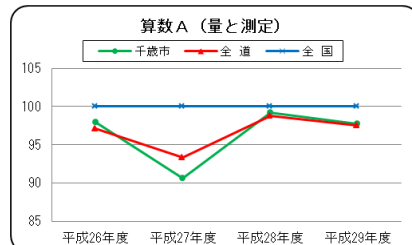
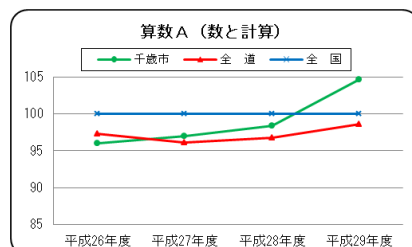
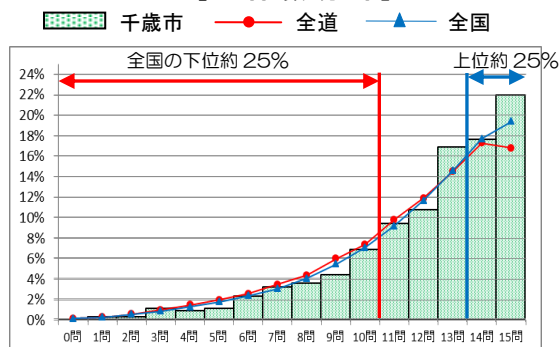
「数と計算」「数量関係」領域の正答率は全国を上回り、「図形」領域についても全国との差が縮まった。

「数と計算」の問題は、8 問出題されたが、計算問題 4 問全てが全国平均を上回り、他の 4 問についても 3 問が全国平均を上回った。また、「数量関係」についても出題された 3 問全てが全国を上回った。「量と測定」については、第 3 学年で学習した任意単位による測定の問題の正答率が全国を下回ったが、第 5 学年の内容の問題については全国を上回った。「図形」については、これまで全国平均を下回っていた立方体の展開図から、示された面と平行な面を選ぶ問題の正答率が全国を上回り、領域全体の全国との差も縮まった。

今後、基礎・基本の習得を図る各校の取組を継続し、特に、千歳市の課題である基準量と比較量の関係を捉え割合を求める指導の徹底を図っていくことが必要である。



【正 答 数 分 布】



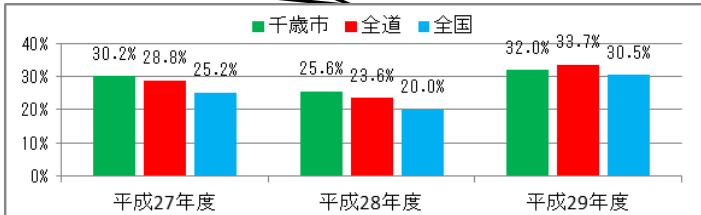
(6) 小学校算数B (主として「活用」に関する問題)

【平均正答率】 上段：平均正答率、下段：全国平均を 100 とした指数

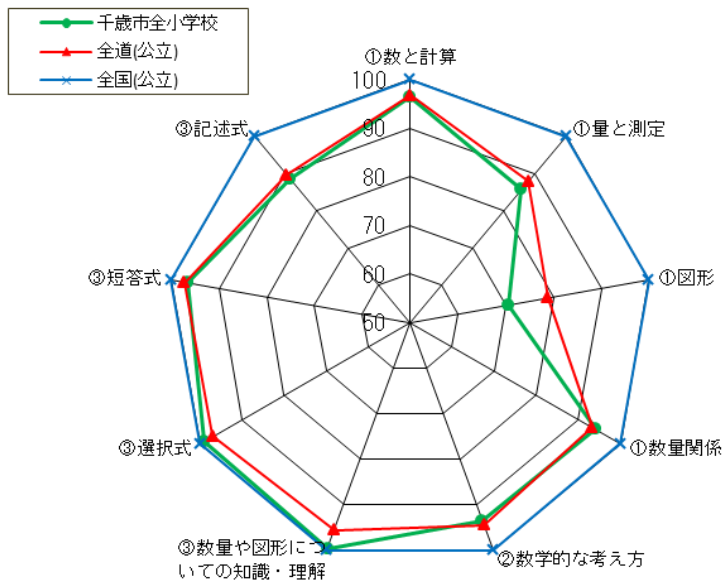
	平成 26 年度	平成 27 年度	平成 28 年度	平成 29 年度
千 歳 市	53.6 92.1	41.8 92.9	42.4 89.8	43.6 95.0
全 道	55.2 94.8	42.5 94.4	44.5 94.3	43.5 94.8
全 国	58.2 100	45.0 100	47.2 100	45.9 100

【全国の下位 25%と同じ正答率の範囲に含まれる児童の割合】

下位層の割合の全国との差は、1.5 ポイントまで縮まったが、上位層の割合が低い状況が見られる。



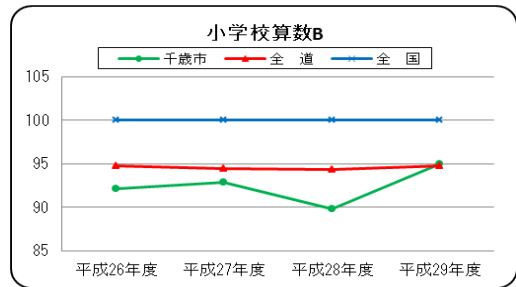
【区別集計結果と領域別正答率の経年変化】



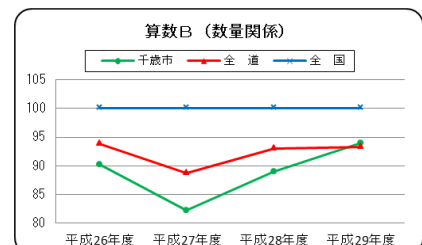
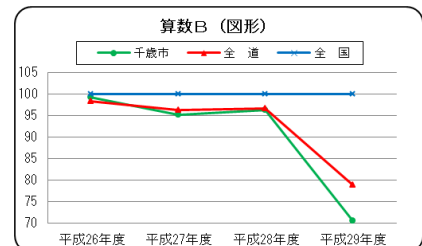
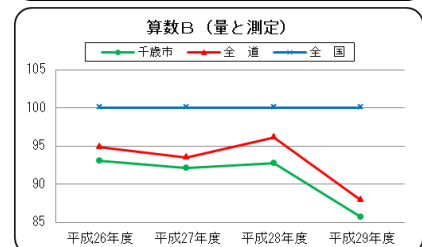
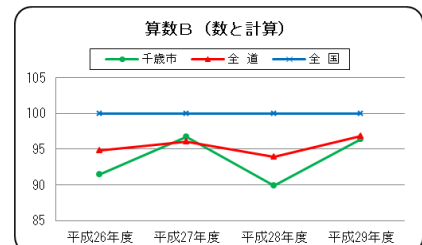
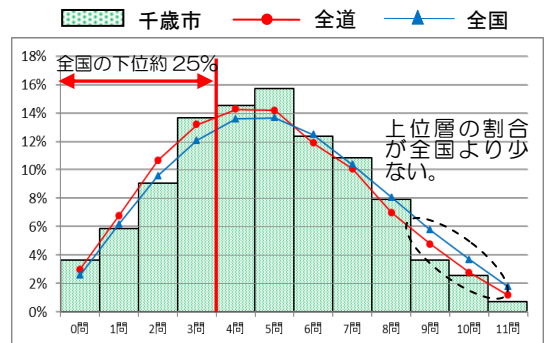
「数と計算」は、改善の兆しが見られ、「数量関係」は全国との差が縮まった。「図形」「量的と測定」は、記述式の問題の正答率が低く全国との差が広がった。

「数と計算」については、5 問中 2 問が全国の上回り、他の 3 問についても全国との差が小さく、改善の兆しが見られる。「量的と測定」については、仮平均の求め方を記述する問題の正答率が全国を大きく下回り、全国との差が広がった。「図形」の正答率の低下の要因は、「最大の満月の直径は最小の満月の直径より 14%長いとき、100 円玉と 500 円玉のどちらの直径に近いか」を記述する問題の正答率が低かったことによるものであった。「数量関係」については、上昇傾向が見られるが、記述式問題の正答率が低く、示された式や数値の意味を読み取り、問われていることを言葉や数、式を用いて説明することに課題が見られる。

今後、ある事柄が成り立つことの理由や判断の理由、表やグラフなどから見出せる傾向や特徴、問題を解決するための自分の考えや解決方法などを数学的に表現する力を高めていくことが必要である。



【正 答 数 分 布】



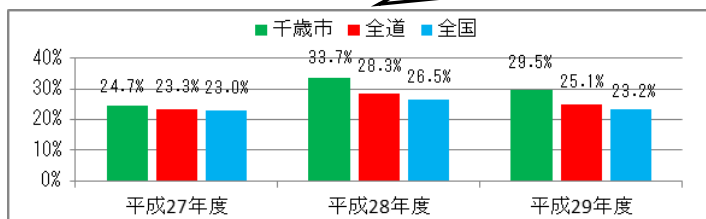
(7) 中学校国語 A (主として「知識」に関する問題)

【平均正答率】 上段：平均正答率、下段：全国平均を 100 とした指数

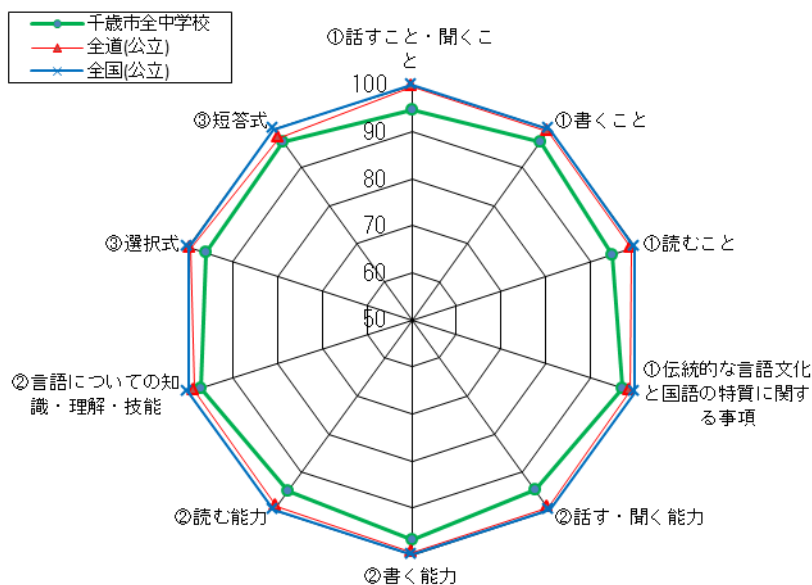
	平成 26 年度	平成 27 年度	平成 28 年度	平成 29 年度
千 歳 市	80.2 101.0	74.9 98.8	72.8 96.3	74.6 96.4
全 道	79.4 100	75.8 100	75.1 99.3	76.7 99.1
全 国	79.4 100	75.8 100	75.6 100	77.4 100

【全国の下位 25%と同じ正答率の範囲に含まれる生徒の割合】

下位層の割合の全国との差は、6.3 ポイントと依然として高く、今後も平成 27 年度の水準をめざし、下位層の学力向上に取り組む必要がある。



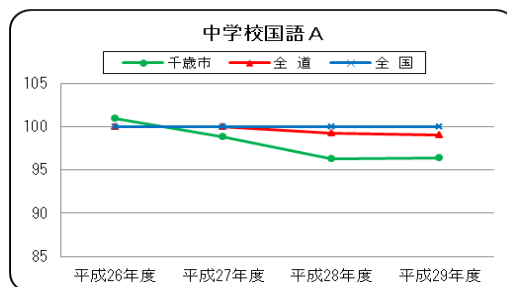
【区分別集計結果と領域別正答率の経年変化】



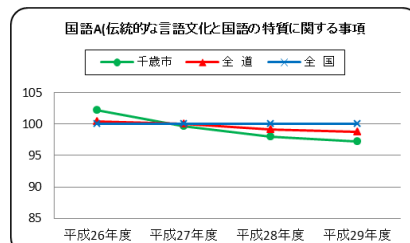
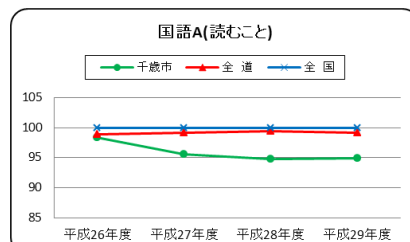
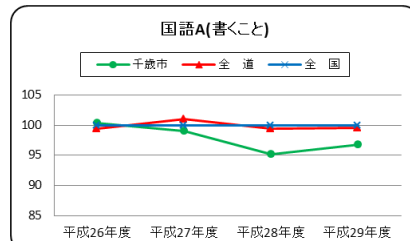
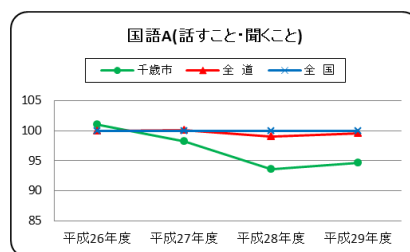
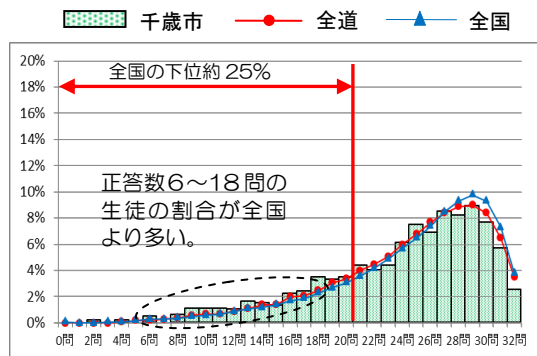
「話すこと・聞くこと」「書くこと」については、わずかではあるが全国との差が縮まったが、「読むこと」については、3 年連続変化は見られず、「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」については、低下傾向が続いている。

「話すこと・聞くこと」「書くこと」については、全国との正答率の差がそれぞれ 1.1 ポイント、1.7 ポイント縮まったが、「読むこと」については、3 年連続変化が見られず改善の兆しが見られない。「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」については、17 問中全国の正答率を上回ったのは 5 問であり、低下傾向が続いている。

今後、全領域について改善に向けた取組の徹底を図る必要があるが、特に、日常的な漢字指導や語彙を豊かにする指導を工夫し、適切に使うことができるようにする必要がある。



【正 答 数 分 布】



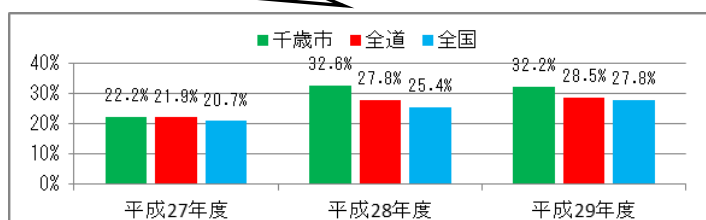
(8) 中学校国語B (主として「活用」に関する問題)

【平均正答率】 上段：平均正答率、下段：全国平均を 100 とした指数

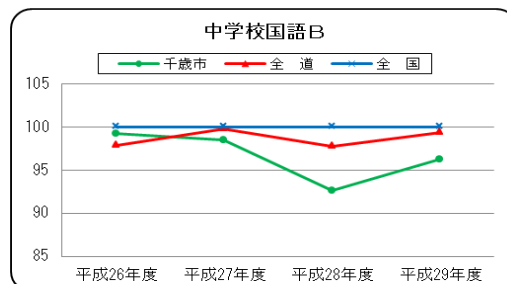
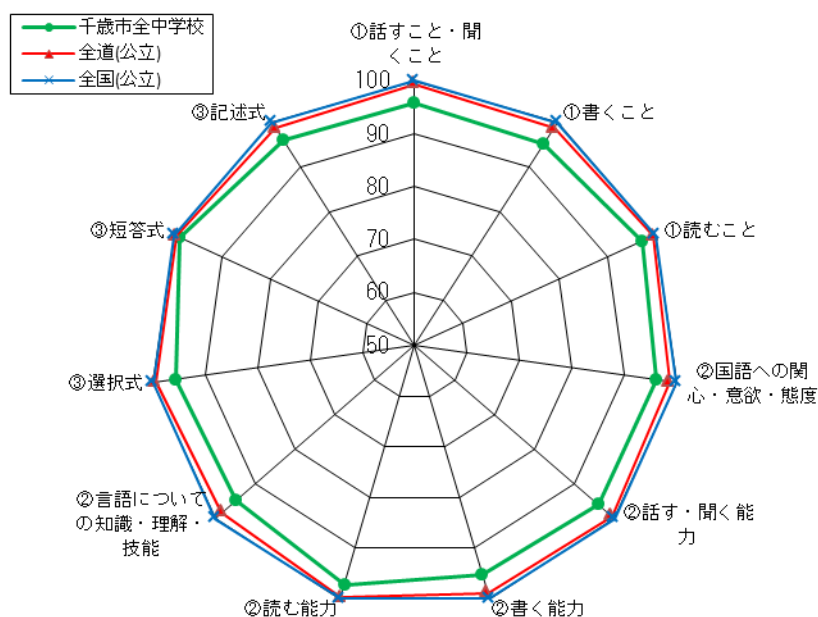
	平成 26 年度	平成 27 年度	平成 28 年度	平成 29 年度
千 歳 市	50.6 99.2	64.8 98.5	61.6 92.6	69.5 96.3
全 道	49.9 97.8	65.7 99.8	65.0 97.7	71.7 99.3
全 国	51.0 100	65.8 100	66.5 100	72.2 100

【全国の下位 25%と同じ正答率の範囲に含まれる生徒の割合】

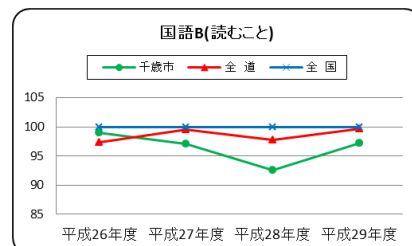
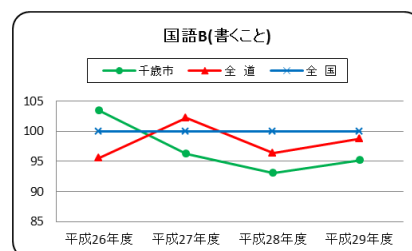
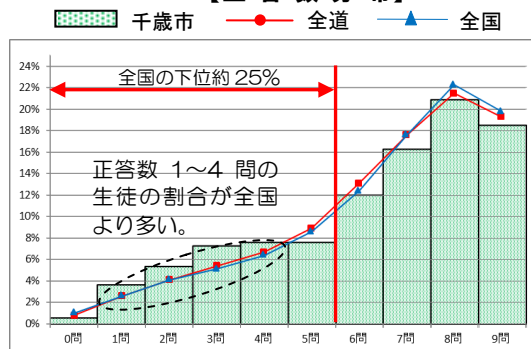
国語 A と同様の傾向が見られ、下位層の学力向上に取り組む必要がある。



【区別集計結果と領域別正答率の経年変化】



【正 答 数 分 布】



「話すこと、聞くこと」「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」の領域の問題は、平成 26 年度、平成 27 年度、平成 28 年度の 3 カ年間出題されていないため、経年変化グラフは掲載していません。

「書くこと」「読むこと」とともに低下傾向が続いていたが、回復の兆しが見られる。

本年度は「話すこと・聞くこと」の問題が 3 問出題され、本市生徒の正答率は 69.4%、全国の正答率は 71.9%(全国比 95.9%)であった。「書くこと」については、低下傾向が続いていたが、本年度は上昇に転じ回復の兆しが見られる。「読むこと」については、平成 27 年度の水準を上回り、全国との正答率の差が 2.5 ポイントと大幅に縮まった。これまで、記述式問題を苦手とする傾向が見られていたが、本年度出題された記述式問題 3 問の正答率は、全国を下回ったものの全て 1.5 ポイント以内となっており、改善が見られる。

今後、目的に応じて必要な情報を読み取る能力や根拠を明確にして感じたことや考えたことを書く能力を高めていくことが必要である。

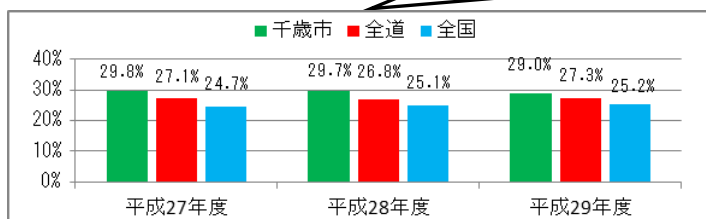
(9) 中学校数学 A (主として「知識」に関する問題)

【平均正答率】 上段：平均正答率、下段：全国平均を 100 とした指数

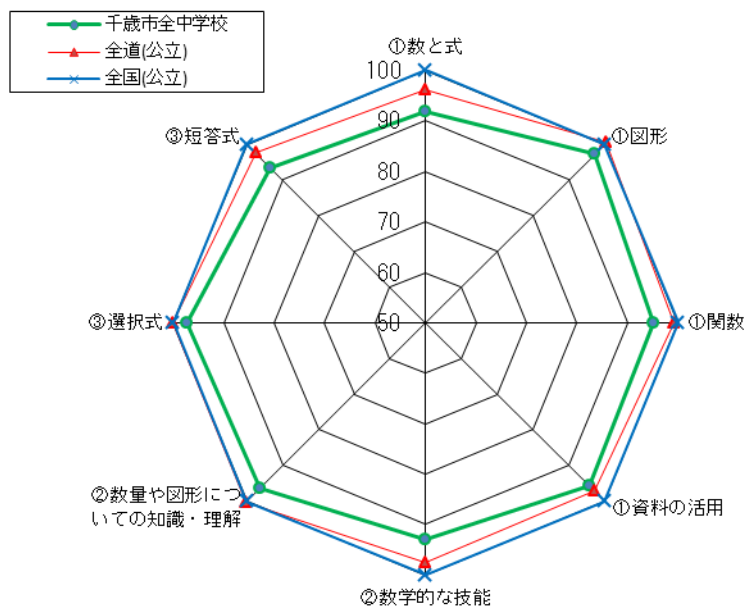
	平成 26 年度	平成 27 年度	平成 28 年度	平成 29 年度
千 歳 市	64.5 95.7	60.9 94.6	59.3 95.3	61.4 95.0
全 道	66.0 97.9	63.0 97.8	61.8 99.4	63.7 98.6
全 国	67.4 100	64.4 100	62.2 100	64.6 100

【全国の下位 25%と同じ正答率の範囲に含まれる生徒の割合】

下位層の割合は、3 年連続減少しているが、正答数 9 問以下の生徒の割合が高い状況が見られる。また、上位層の割合が全国より低い状況が見られる。



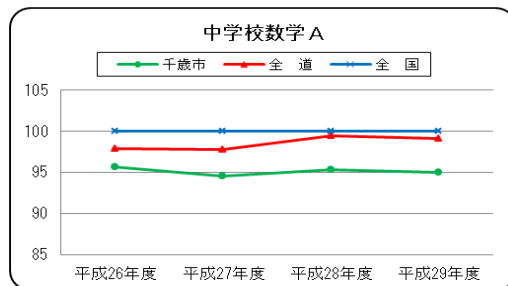
【区別集計結果と領域別正答率の経年変化】



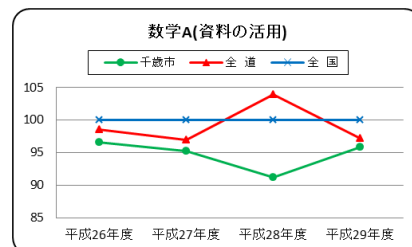
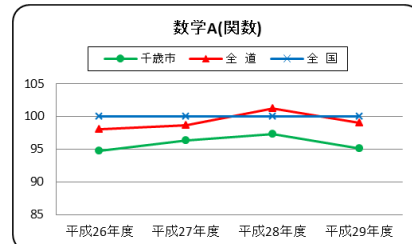
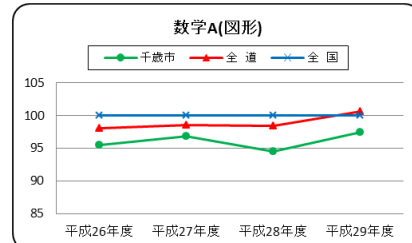
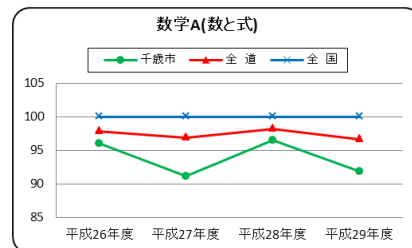
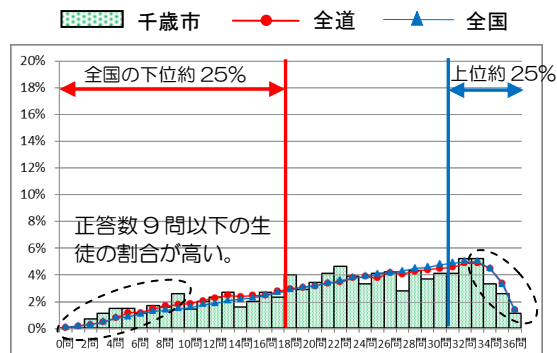
平成 26 年度以降、二領域が前年度を上回り、二領域が前年度を下回るとい状況が続いており、四領域の内容の習得に偏りが見られる。

「数と式」については、数や文字を用いた式の計算の問題が 9 問出題されたが、全問全国を下回った。「図形」については、論証に関する問題の正答率は高かったが、扇形の弧の長さを求めること(正答率 22.8%)、円柱の体積を求めること(正答率 44.4%)の正答率は低かった。「関数」については、横ばい状態が続いている。「資料の活用」については、「範囲」や「相対度数」の意味の理解が不十分な状況が見られる。

今後、数や文字を用いた式の計算技能を高め、公式を用いて体積や面積、弧の長さなど求めることができるようにするとともに、「錯角」「比例定数」「範囲」「相対度数」など、数学で使用する用語の意味を理解させ、それらを用いて事象を考察できる能力を高めていく必要がある。



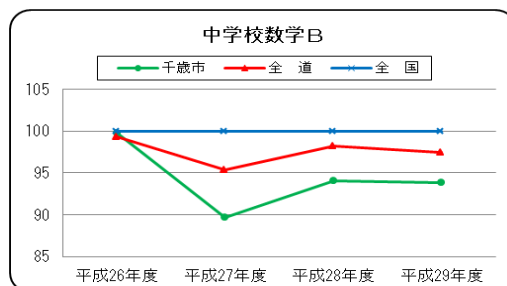
【正 答 数 分 布】



(10) 中学校数学B (主として「活用」に関する問題)

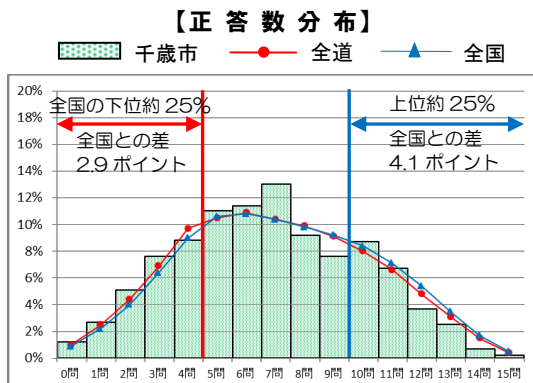
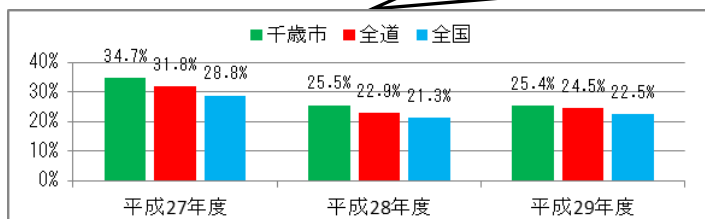
【平均正答率】 上段：平均正答率、下段：全国平均を100とした指数

	平成26年度	平成27年度	平成28年度	平成29年度
千歳市	59.7 99.8	37.3 89.7	41.5 94.1	45.1 93.8
全道	59.4 99.3	39.7 95.4	43.3 98.2	46.9 97.5
全国	59.8 100	41.6 100	44.1 100	48.1 100

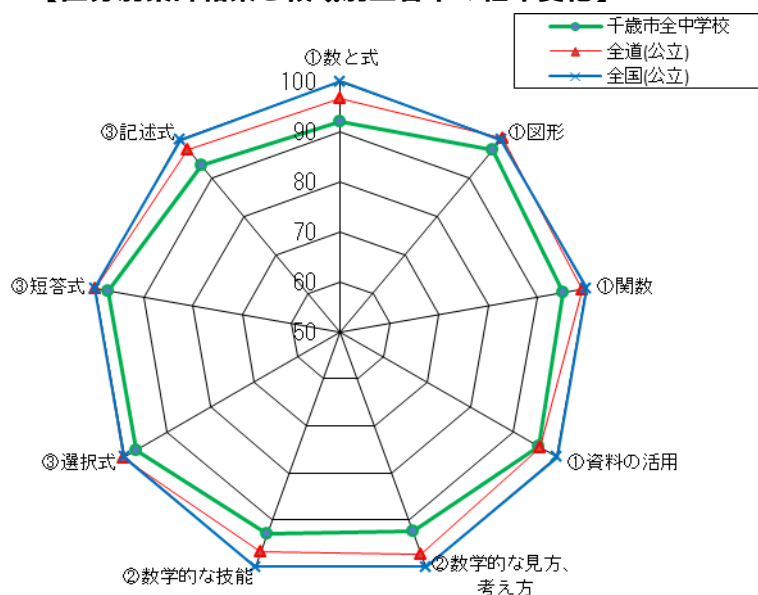


【全国の下位25%と同じ正答率の範囲に含まれる生徒の割合】

上位層の割合については、全国との差は2.9ポイントであるが、上位層の割合については、全国との差が4.1ポイントとなっており、上位層への対応に課題が見られる。



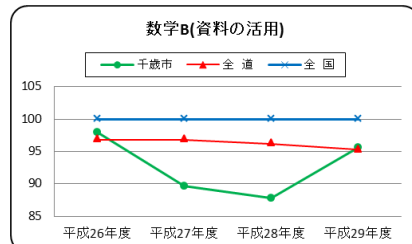
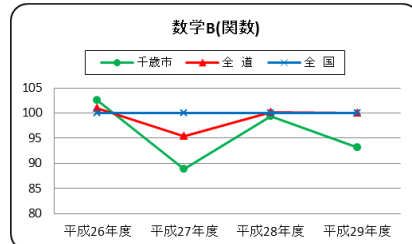
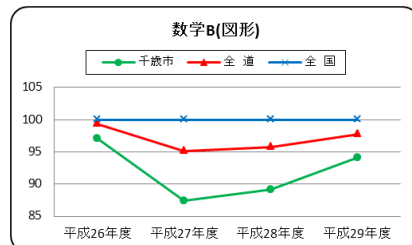
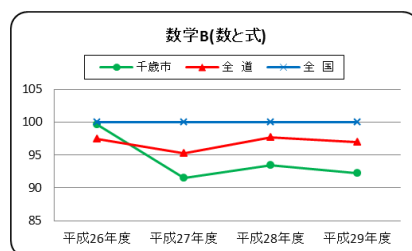
【区別集計結果と領域別正答率の経年変化】



「図形」と「資料の活用」は前年度を上回ったが、「数と式」「関数」が前年度を下回ったため、数学B全体の平均正答率は前年度と同様であった。

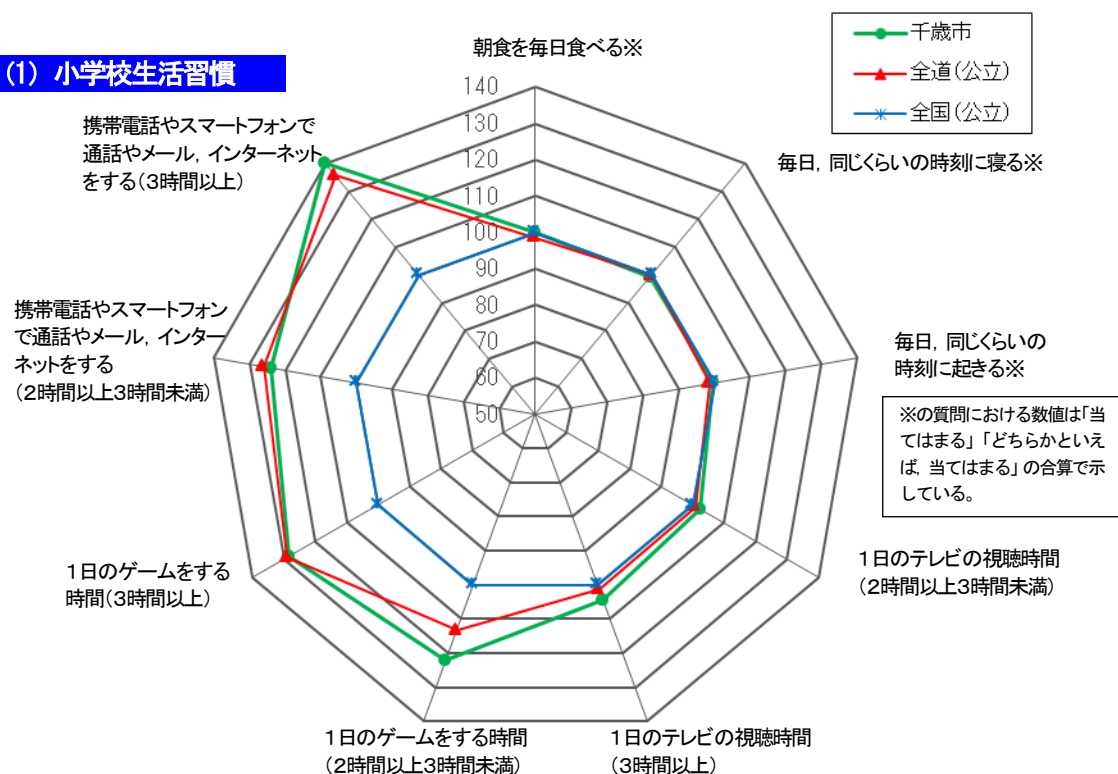
「数と式」については、横ばいの状況が3年続いている。「図形」については、論証に関する問題の正答率が高く2年連続正答率が向上した。「関数」については、記述式問題の正答率が12.9%と低く、昨年度を下回った。「資料の活用」については、3問中1問が全国平均を上回ったものの、記述式問題の正答率が13.2%と低く、数学的に思考し、数や式、記号などを用いて表現することに課題が見られる。

今後、数式を根拠に事柄が成り立つ理由を説明する学習活動や資料の傾向を的確に捉えて判断し、その理由を数学的な表現を用いて説明する学習活動を工夫し、論理的に考える力や数学的に表現する力を高めていくことが必要である。

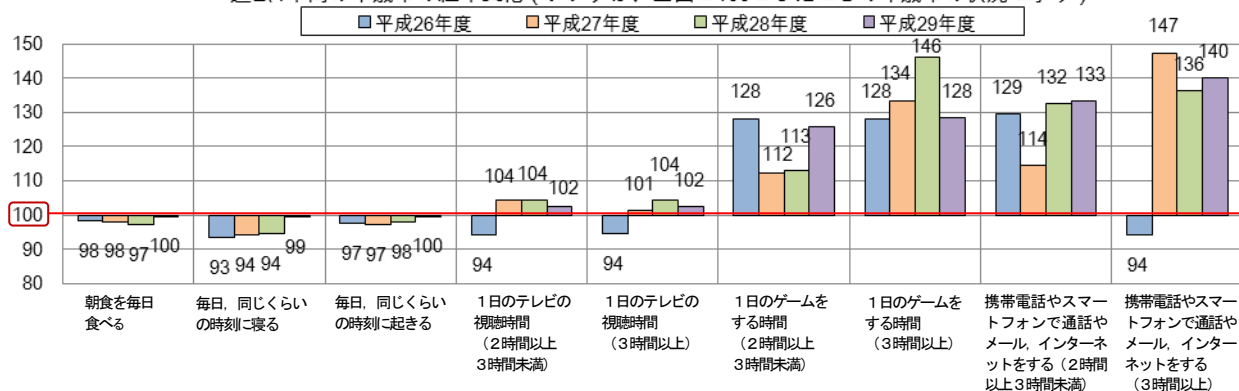


3 生活習慣や学習環境に関する質問紙（児童生徒質問紙）の結果

(1) 小学校生活習慣



過去4年間の千歳市の経年変化（グラフは、全国を100としたときの千歳市の状況を示す）



朝食の摂取、就寝・起床時刻の状況については、全国とほぼ同様で、市としては改善傾向にある。また、1日のテレビの視聴時間、ゲームをする時間については改善傾向にあるものの、依然として全国と比較して長時間である状態が続いている。携帯電話やスマートフォンでの通話やインターネットをする時間が増加する傾向に歯止めがかからず、憂慮される結果となった。

朝食の摂取については、「毎日食べる」の児童が増え、全国と同様であることに加え、「食べない」児童も減っている。定時の就寝・起床時刻についても、改善が続いている。

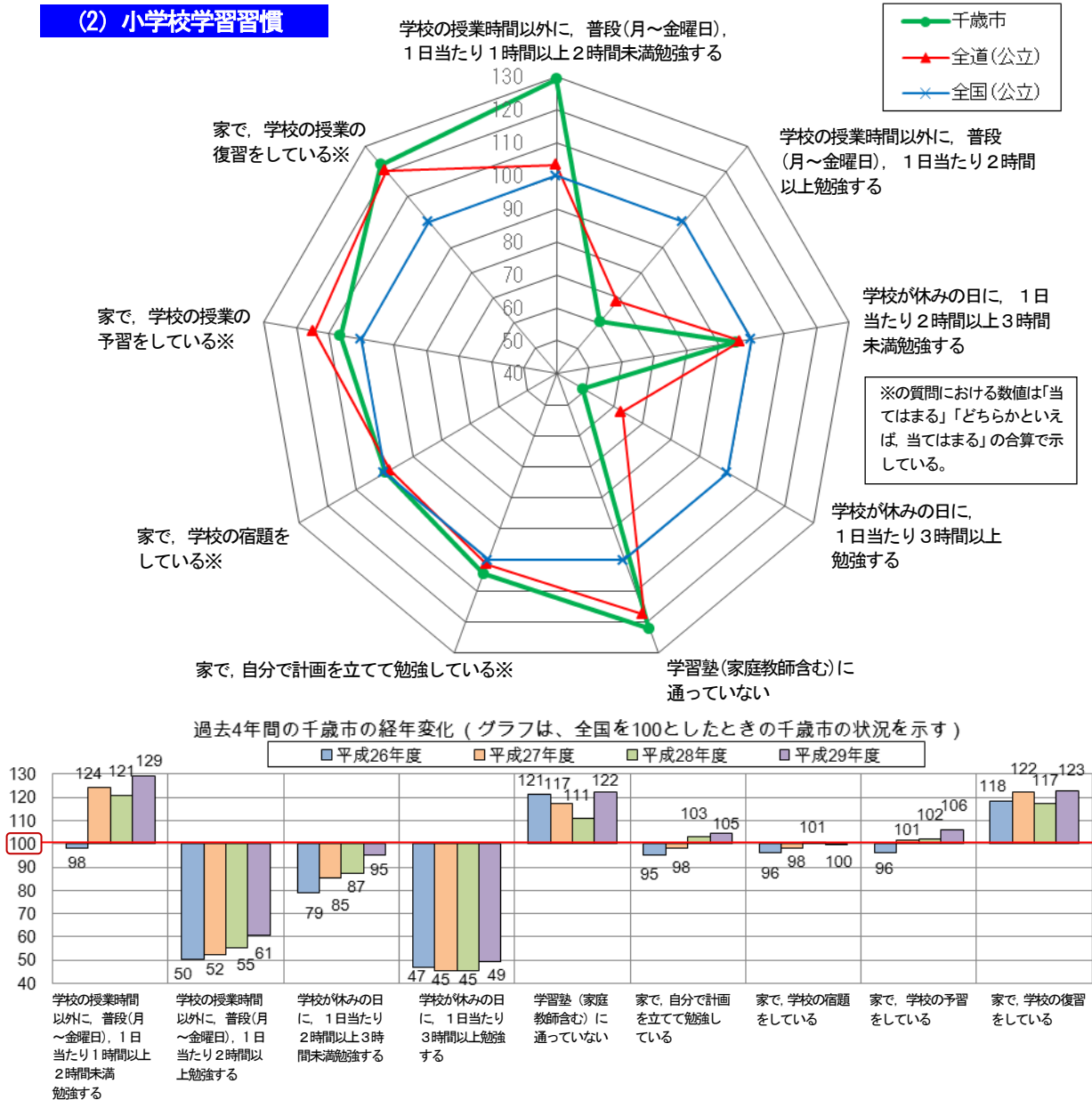
テレビの視聴時間については、「2時間以上3時間未満」「3時間以上」と回答した児童の割合が、共に全国を100とした指数で102であり、ほぼ同様の結果である。

ゲームをする時間（携帯端末によるゲームを含む）については、3時間以上費やしている児童の割合は減少したものの、依然として、全国を大きく上回っている。

携帯電話、スマートフォンで通話やメール、インターネットをする時間については、「2時間以上使用している」児童は依然として全国を大きく上回った。また、携帯電話やスマートフォンの使い方について、「家の人と約束したことを守っているか」という質問に対して、「守っていない」「あまり守っていない」「約束はない」と回答した児童の割合の合算は全国を2.3ポイント上回っている。

引き続き、千歳市PTA連合会が提唱した「千歳市家庭生活宣言」を利用した啓発の促進をはじめ、PTAと学校が一体となった取組を強化し、児童の「生活習慣の改善」を図っていく必要がある。

(2) 小学校学習習慣



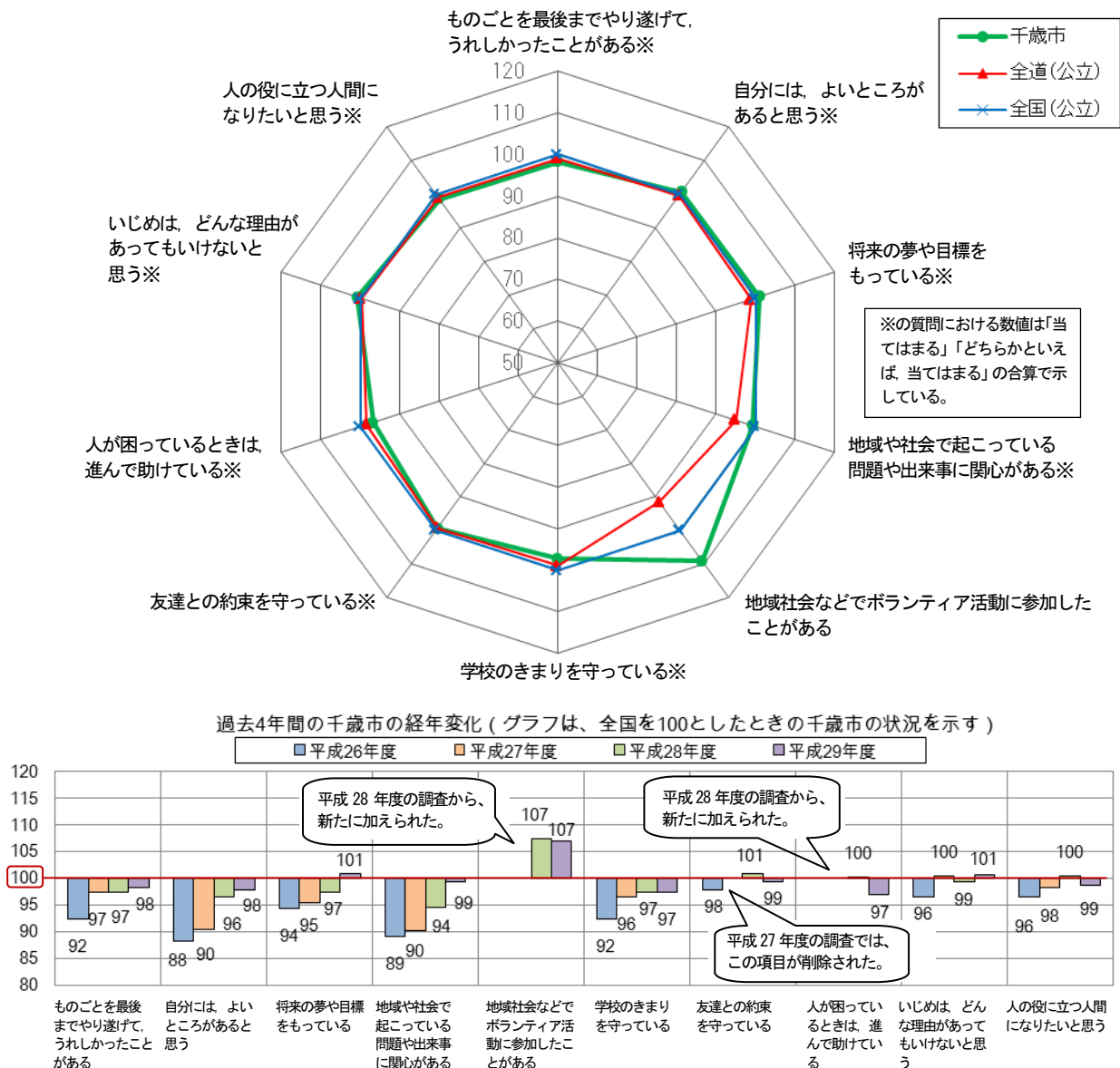
学校以外に、普段1時間以上2時間未満勉強する児童の割合は、全国を上回る状態が続いているが、普段2時間、休日3時間を超えておらず、1週間の学校以外での学習時間が全国より少ない状況が見られる。

学校以外に、普段1時間以上2時間未満勉強する児童の割合は、各学校が取り組んできた授業改善をはじめ、「学年×10分+10分の家庭学習」の取組等により、全国を上回り、学習の取組内容についても、「自分で計画を立てて勉強している」「予習をしている」「復習をしている」と回答した児童は増加しており、主体的に家庭学習に取り組む児童が増えている。しかし、2時間以上勉強する児童の割合については、改善傾向は見られるものの、全国と比べて低い状態が続いている。

一方、休日の学習時間については、2時間以上3時間未満勉強する児童は、年々増加しているが、3時間以上学習する児童の割合は横ばいの状態が続いている。本調査では、学校以外の学習に、塾での勉強時間を含めているため、通塾の状況についても調査しているが、学習塾(家庭教師を含む)に通っていない児童の割合は、全国を100とした指数が122であり、ここ4年間で最も高くなっている。このような状況を踏まえ、週末課題を提供するなど、休日の学習を支援することが必要である。

1週間の学校以外での学習時間を増やすためには、次の授業につながる家庭学習のアドバイスや児童が予習してきたことが授業で生かされるような授業改善に取り組む必要がある。

(3) 小学校自尊感情・規範意識等



自尊感情に関する質問において、肯定的な回答の割合が年々高まっている。また、地域社会などでボランティア活動に参加したことがあるという回答の割合が、昨年度に引き続き、全国を上回っている。

自尊感情に関して、「自分には、よいところがあると思う」「将来の夢や目標がある」と回答した児童の割合が、年々高くなり、全国と同様となっている。

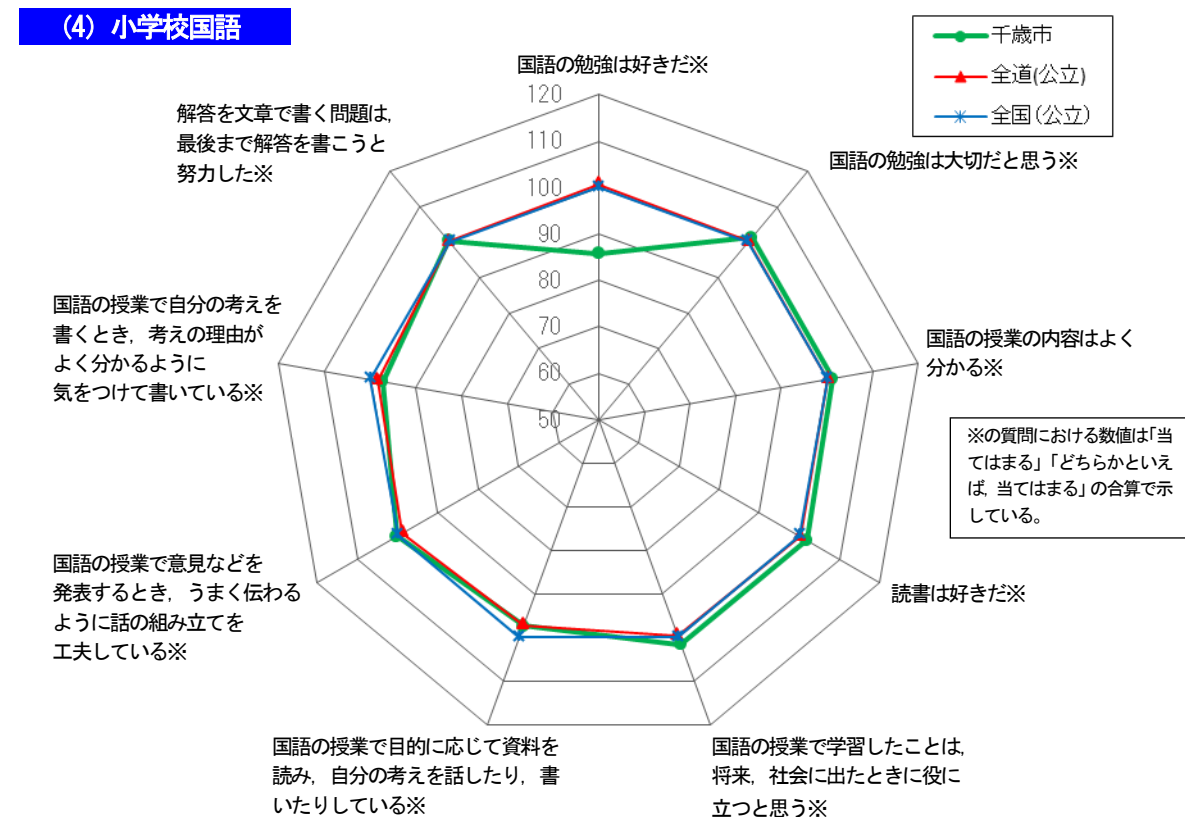
地域との関わりについては、「地域や社会で起こっている問題や出来事に関心がある」児童の割合は年々増加しており、「地域社会などでボランティア活動に参加したことがある」児童の割合も全国を上回っている。

規範意識については、「学校のきまりを守っている」という質問に対して「当てはまる」「どちらかといえば、当てはまる」と回答した児童の割合の合算は昨年度とほぼ同様であるが、「当てはまる」と回答した児童の割合は1ポイント増えている。

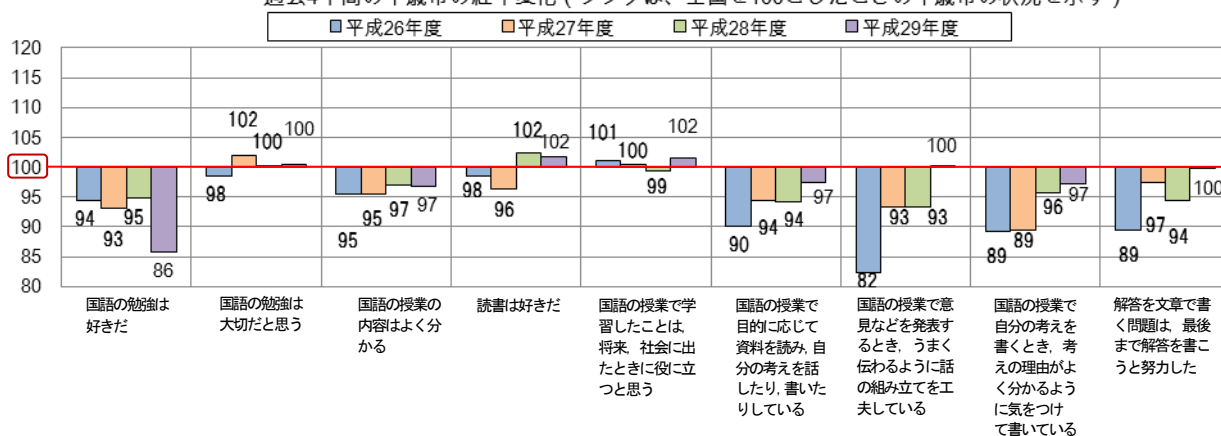
他者理解については、「いじめは、どんな理由があってもいけないと思う」と回答した児童は、全国を100とした指数が101とやや上回っている。「人が困っているときは、進んで助けている」と回答した児童の割合は下がり、児童の行動面としての自己評価は高くない。

千歳市の小・中学校においては、ハイパーQ U検査等を有効に活用し、より高め合える学習集団の形成に向けた取組を行っている。今後も、学級集団の状況を客観的に把握しながら、児童の学級満足度を高める学級経営を推進し、自尊感情や規範意識を一層高めていくとともに、いじめはどんな理由があってもいけない行為であることを理解させ、児童による「いじめ」防止の運動を展開していくことが必要である。

(4) 小学校国語



過去4年間の千歳市の経年変化（グラフは、全国を100としたときの千歳市の状況を示す）



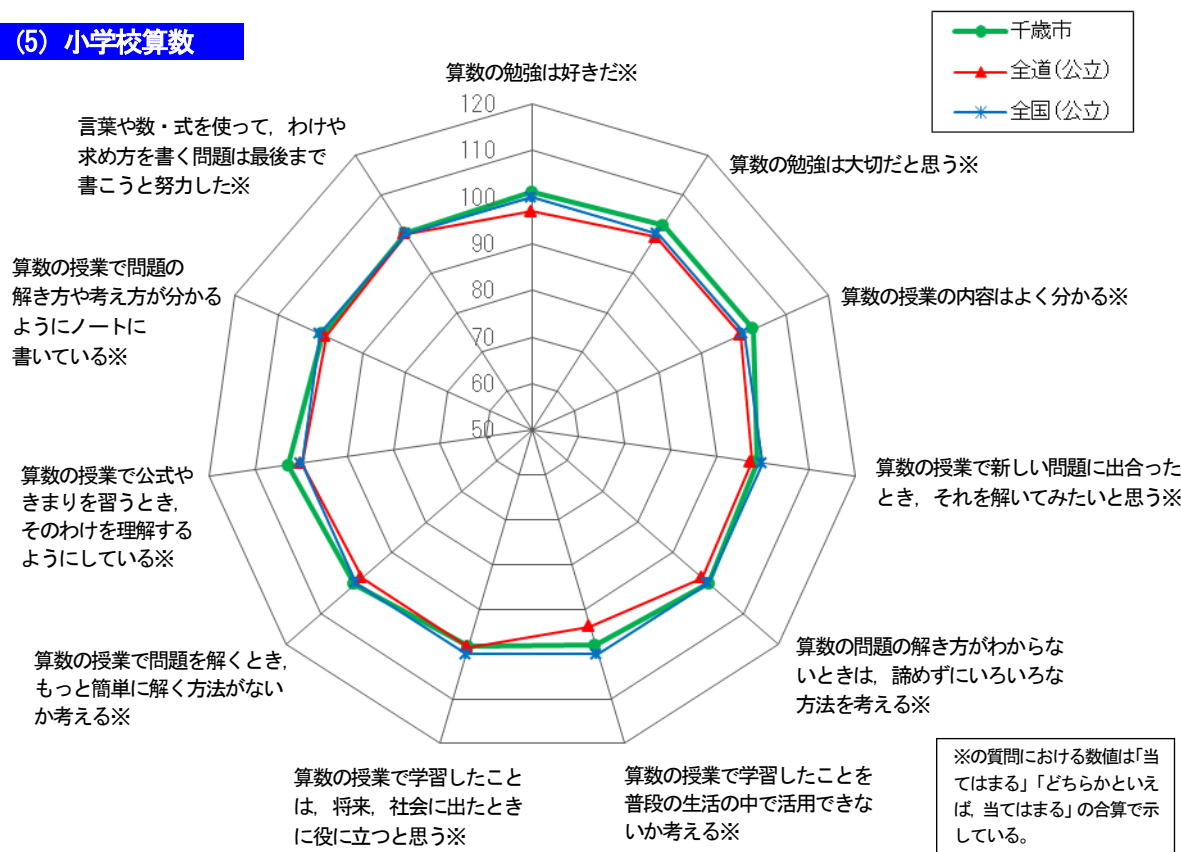
国語に対する関心・意欲・態度については、「国語の勉強は大切だ」、「将来、役に立つと思う」と回答した児童の割合が、全国と同様となっている。国語の授業における学び方については、全ての質問項目で改善傾向にある。一方で、「国語の勉強が好きだ」と回答した児童の割合は過去4年間で最低となった。

国語に対する関心・意欲・態度に関しては、「国語の勉強は大切だと思う」「国語の授業で学習したことは、将来、社会に出たときに役に立つと思う」と回答した児童の割合は、全国と同様である。また、「読書が好き」と回答した児童の割合も昨年に引き続き、全国を上回っている。一方で、「国語の勉強は好きだ」と回答した児童の割合が大きく低下した。

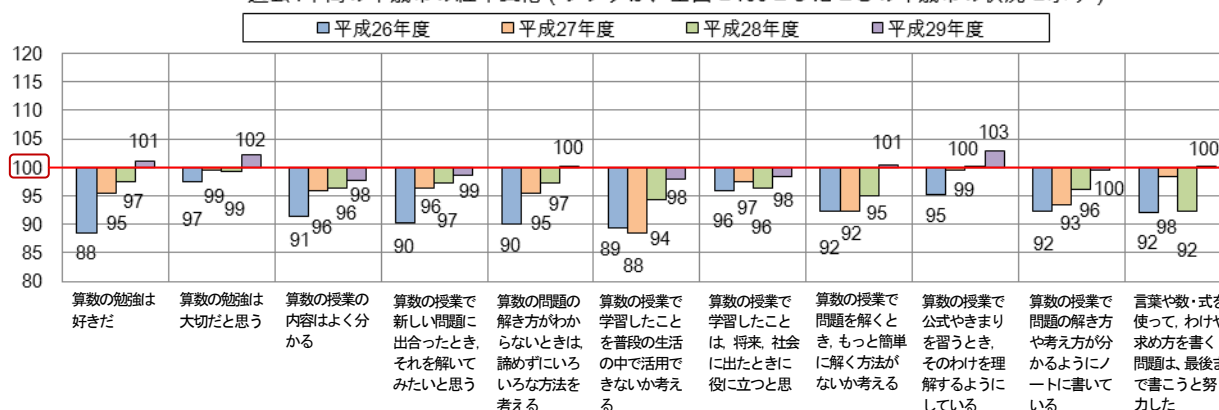
国語の学び方については、「目的に応じて資料を読み、自分の考えを話したり、書いたりしている」「国語の授業で自分の考えを書くとき、考えの理由がより分かるように気をつけて書いている」と回答した児童の割合は4年連続で増加し、「発表するとき、うまく伝わるように話の組み立てを工夫している」と回答した児童の割合は全国と同様であった。

各校において、児童の実態を分析し、デジタル教科書や学校図書館の効果的な活用と併せて、国語の学習に対する児童の関心・意欲・態度を高めていく必要がある。

(5) 小学校算数



過去4年間の千歳市の経年変化（グラフは、全国を100としたときの千歳市の状況を示す）



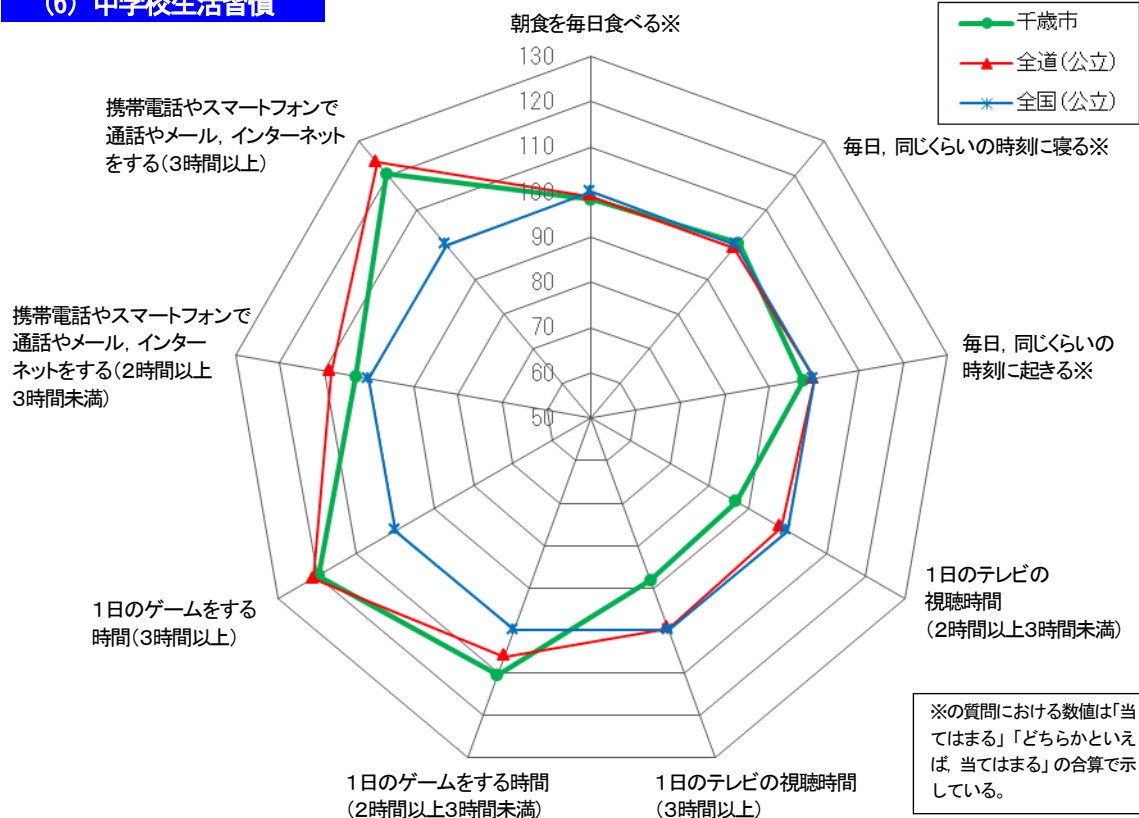
「算数の勉強が好きだ」と回答した児童の割合は過去4年間で最高となり、全国を上回った。また、算数に対する関心・意欲・態度に関する質問、算数の授業における学び方に関する質問、全ての質問項目において、肯定的な回答の割合が増加している。

算数に対する関心・意欲・態度に関しては、「算数の勉強が好きだ」「算数の勉強は大切だ」と回答した児童の増加傾向は続き、初めて全国を上回った。また、「授業の内容がよくわかる」と回答した児童の割合も4年連続増加している。

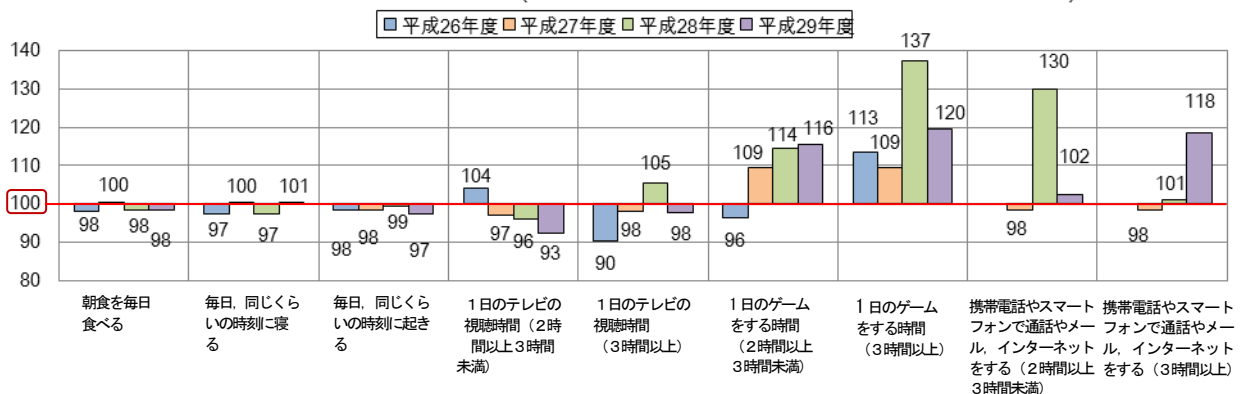
算数の学び方については、全ての質問において、肯定的な回答の割合が増え、中でも、「算数の授業で問題をとくとき、もっと簡単に解く方法がないか考える」、「算数の授業で公式やきまりを習うとき、そのわけを理解するようにしている」などの質問に対する肯定的な回答の割合は全国を上回っている。

このような状況は、各学校において、学習支援員を活用した習熟度別少人数指導の促進やICT機器の効果的な活用、学力向上検討委員会による授業改善の提言を学校改善プラン等に反映させて取り組んだ成果と捉えることができる。今後も、算数に対する関心・意欲・態度を一層高め、「算数好き」の児童を育てていくことが大切である。

(6) 中学校生活習慣



過去4年間の千歳市の経年変化（グラフは、全国を100としたときの千歳市の状況を示す）



朝食の摂取、就寝・起床時刻の状況については、全国とほぼ同様である。また、1日のテレビの視聴時間については、改善傾向にあり、全国よりも低い状況となった。一方で、ゲームをする時間、携帯電話やスマートフォンでの通話やインターネットをする時間は昨年より改善したものの、全国を上回っている。

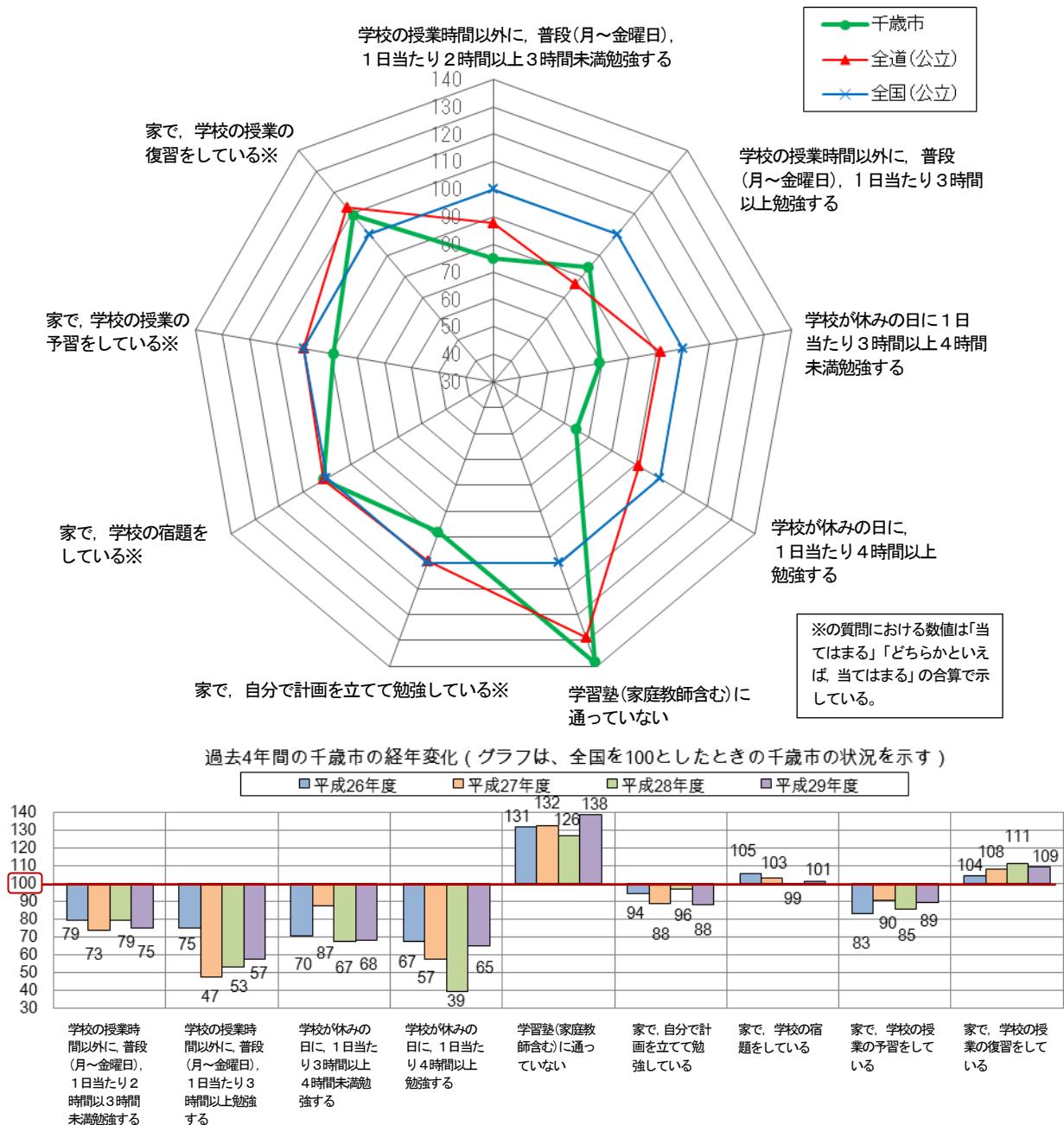
朝食の摂取、定時の就寝・起床に関する回答から、基本的な生活習慣の定着が図られてきている状況が見られる。

テレビの視聴時間については、「2時間以上」と回答した生徒の割合が、減少傾向にあり、全国よりも低い割合になっている。ゲームをする時間（携帯端末によるゲームを含む）については、昨年度より改善が見られるものの、依然として全国を大きく上回っている。

携帯電話、スマートフォンで通話やメール、インターネットをする時間については、2時間以上使用している生徒の割合が昨年より減少したものの全国を大きく上回っている。また、携帯電話やスマートフォンの使い方について、家の人と約束したことを守っているかという設問に対して、「守っていない」「あまり守っていない」「約束はない」と回答した生徒の割合の合算は、全国よりも1.2ポイント高い。

引き続き、千歳市PTA連合会が提唱した「千歳市家庭生活宣言」の啓発の促進をはじめ、PTAと学校が一体となった取組を強化すると共に、小・中学校における指導の連携も必要である。

(7) 中学校学習習慣



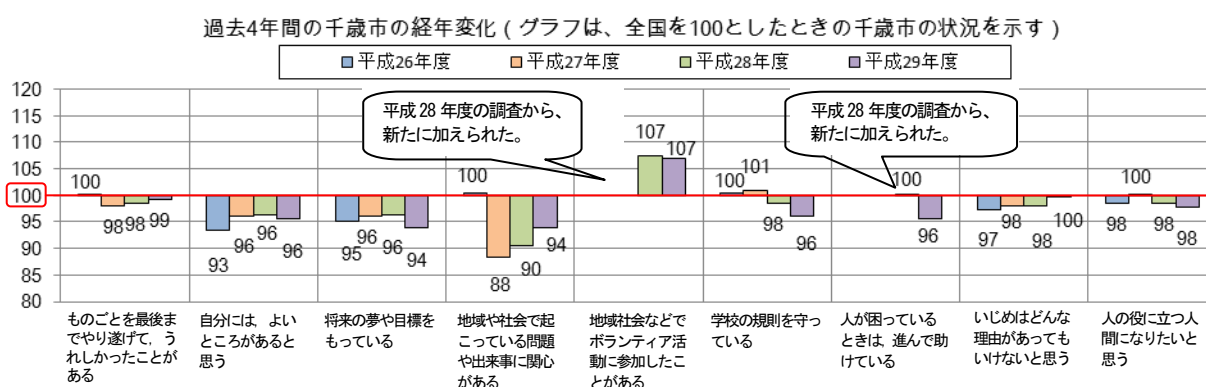
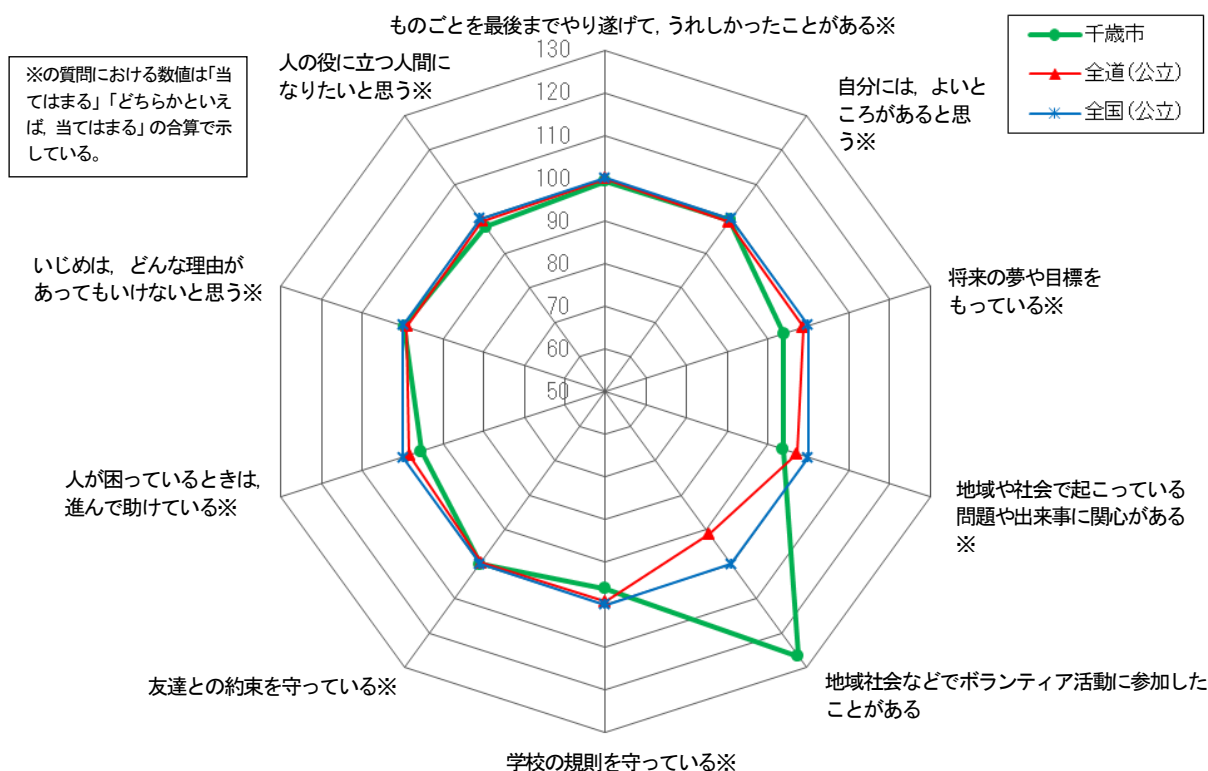
1週間あたりの家庭学習の時間は全国を下回る状況が続いているが、休日における学習時間については改善傾向が見られる。復習をする生徒の割合は全国を上回る状態が続いているが、自分で計画を立てて勉強したり、予習に取り組む生徒の割合は全国より低い状態が続いている。

学校の授業時間以外に、普段2時間以上勉強する生徒の割合は昨年度とほぼ同様で、依然として全国を下回る状況が続いている。休日の学習時間については、3時間以上勉強する生徒の割合は全国を下回っているものの、改善傾向が見られる。学習塾(家庭教師を含む)に通っていない生徒の割合は全国を100とした指数が138と高く、自宅で勉強する生徒が増えている状況が見られるが、自分で計画を立てて勉強する生徒の割合は88.2と低い。

家庭学習の取組内容については、予習より復習に取り組む生徒の割合が多い状況が続いている。

主体的・対話的で深い学びにつなげるためには、家庭学習につながる授業改善が求められる。単元の見通しを示し、生徒が、何を、どのように学ぶのか意識をして、学習に取り組める指導の工夫が必要である。

(8) 学校自尊感情・規範意識等



生徒の自尊感情に関する質問については、大きな変化は見られないが、「将来の夢や目標をもっている」生徒の割合が低下している。規範意識に関する質問については、「学校の規則を守っている」と回答する生徒の割合が昨年を下回り、低下傾向が続いている。

自尊感情に関して、「ものごとを最後までやり遂げて、うれしかったことがある」「自分には、よいところがある」と回答した生徒の割合は、昨年と同様であるが、「将来の夢や目標がある」と回答した生徒の割合が、低下している。自分には、よいところがあると思う」と回答した生徒の割合は、全国を100とした指数が96となっているが、肯定的な回答のうち明確に「あてはまる」という回答した生徒の割合は、全国平均を3ポイント上回っている。

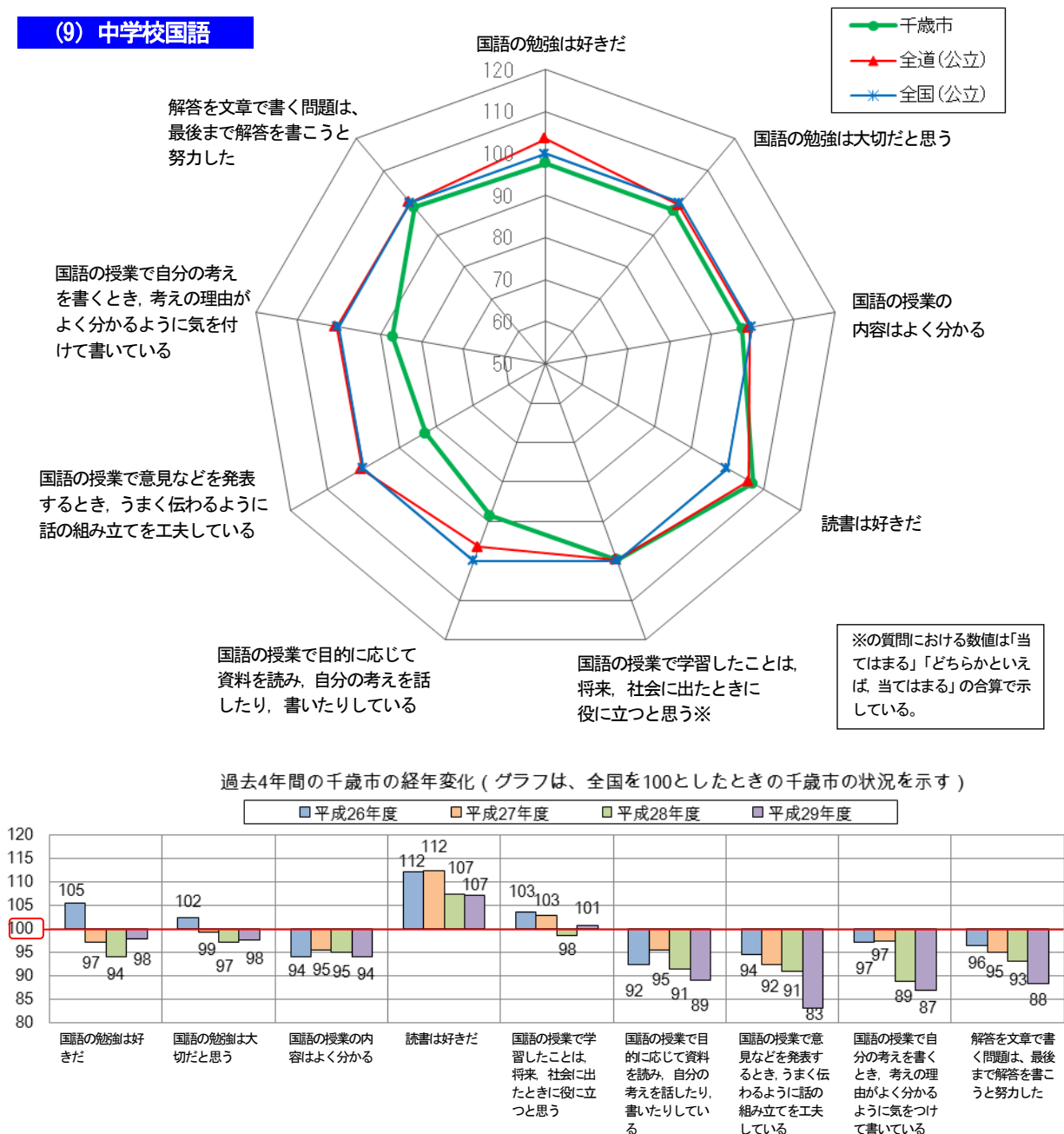
地域との関わりでは、「地域や社会で起こっている問題や出来事に関心がある」「地域社会などでボランティア活動に参加したことがある」生徒の割合は高く、全国を上回っている。

規範意識に関わる「学校の規則を守っているか」という質問への肯定的な回答は低下傾向が続いている。

他者理解については、「いじめはどんな理由があってもいけないと思う」生徒の割合は、全国とほぼ同様である。また、「人が困っているときは、進んで助けている」生徒の割合は全国を100とした指数が95.5であり、全国平均を下回っている。

今後、他者との絆や社会とのつながりを感じ取ることができるボランティアや職場体験等を通して、自尊感情を一層高めていくとともに、地域の一員としての自覚を高めていくことが必要である。

(9) 中学校国語



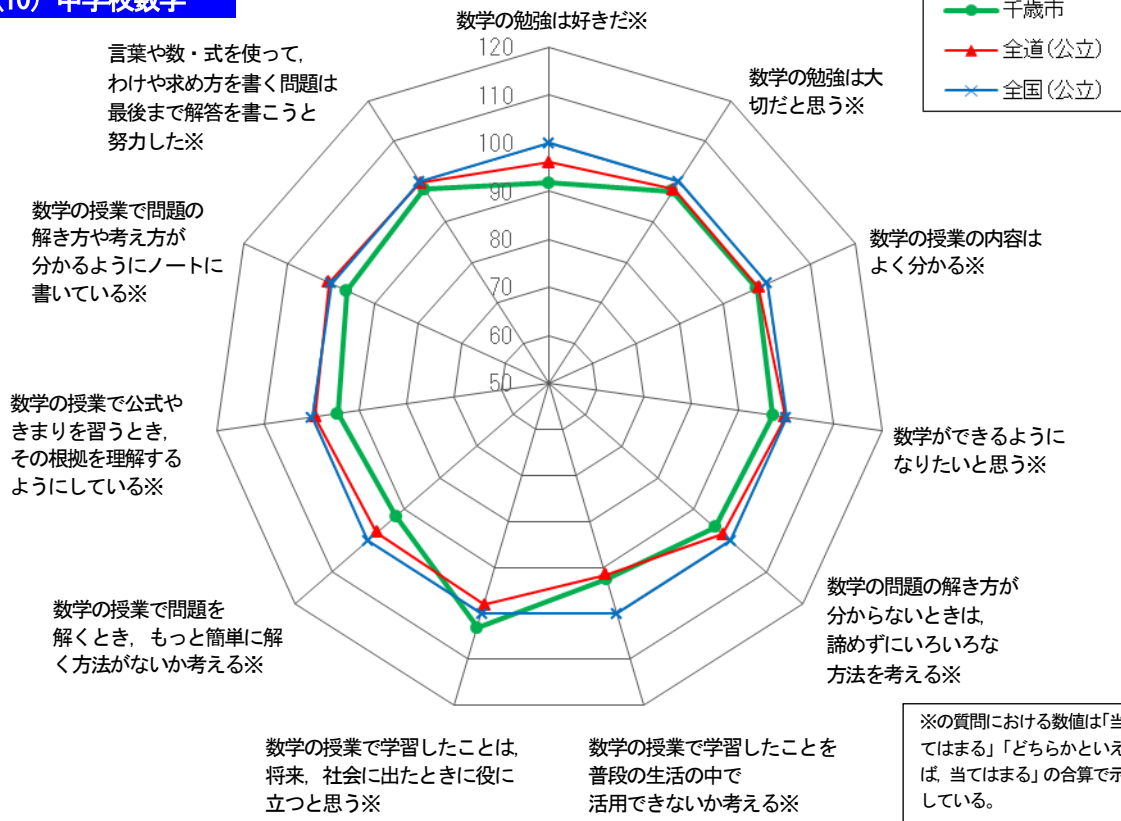
「読書が好きだ」と回答した生徒の割合は、全国を上回る状態を維持している。国語の授業における学び方については、低下傾向が続いており、全国との差が広がっている。

国語に対する関心・意欲・態度に関しては、「読書は好きだ」「国語の授業で学習したことは、将来、社会に出たときに役に立つと思う」と回答した生徒の割合が高く、全国平均を上回っている。一方で、「国語の勉強は好きだ」「国語の勉強は大切だ」「国語の授業はよく分かる」と回答した生徒の割合が全国を下回る状況が続いている。

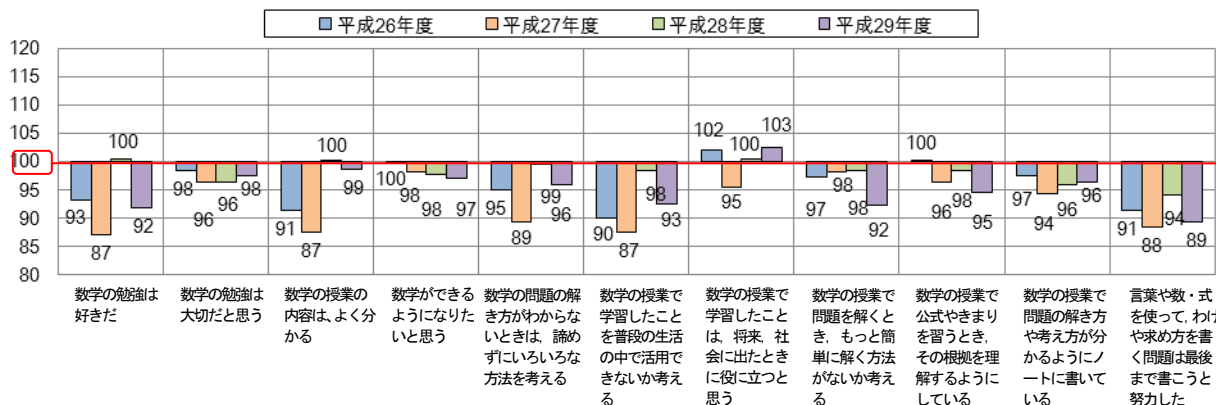
国語の学び方については、「目的に応じて資料を読み、自分の考えを話したり、書いたりしている」「発表するとき、うまく伝わるように話の組み立てを工夫している」「自分の考えを書くとき、考えの理由がより分かるように気をつけて書いている」という質問に対する肯定的な回答の割合が低く、全国との差が広がっている。いずれも、国語の授業において、主体的に思考する学習の在り方を問う質問である。

今後、授業改善の視点として、単元で身に付けさせる力を明確にすること、一時間の学習の課題を明確にすること、生徒自らが主体的に課題解決に取り組む展開の工夫、単元や一時間の授業で分かったことを振り返る場面の設定、複数の資料を読み比べて自分の考えを持たせることなどの取組が重要である。

(10) 中学校数学



過去4年間の千歳市の経年変化（グラフは、全国を100としたときの千歳市の状況を示す）



「数学の勉強は大切だ」「数学の授業で学習したことは、将来、社会に出たときに役に立つと思う」と回答した生徒の割合が増え、全国と同様もしくは上回っている。一方で、「数学の勉強は好きだ」と回答した生徒の割合は全国を100とした指数が92と低く、その差が広がっている。

数学に対する関心・意欲・態度に関しては、「数学の勉強は大切だ」「数学の授業で学習したことは、将来、社会に出たときに役に立つと思う」と回答した生徒の割合が増えている。また、「数学ができるようになりたいと思う」生徒の割合は全国を100とした指数が97であり、「数学の問題の解き方がわからないときは、諦めずにいろいろな方法を考える」生徒の割合も96であり、ともに全国を下回っている。

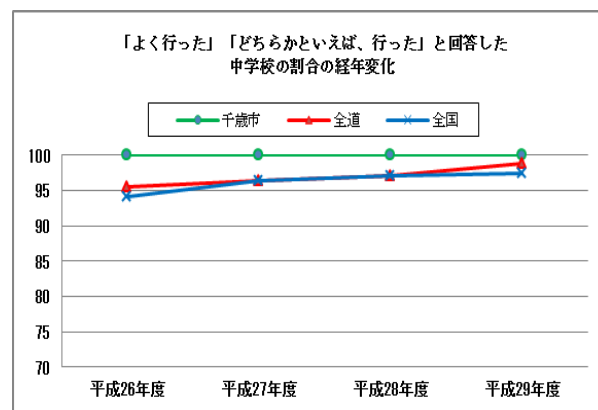
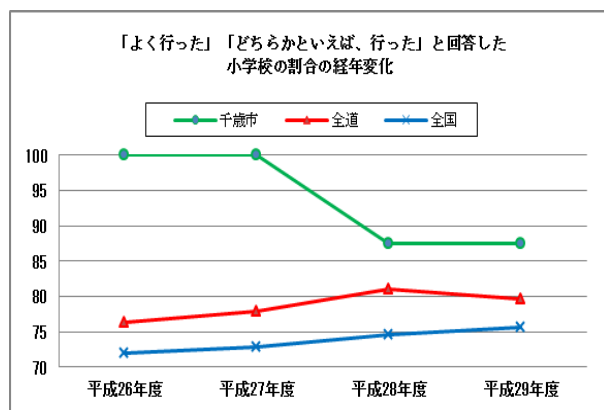
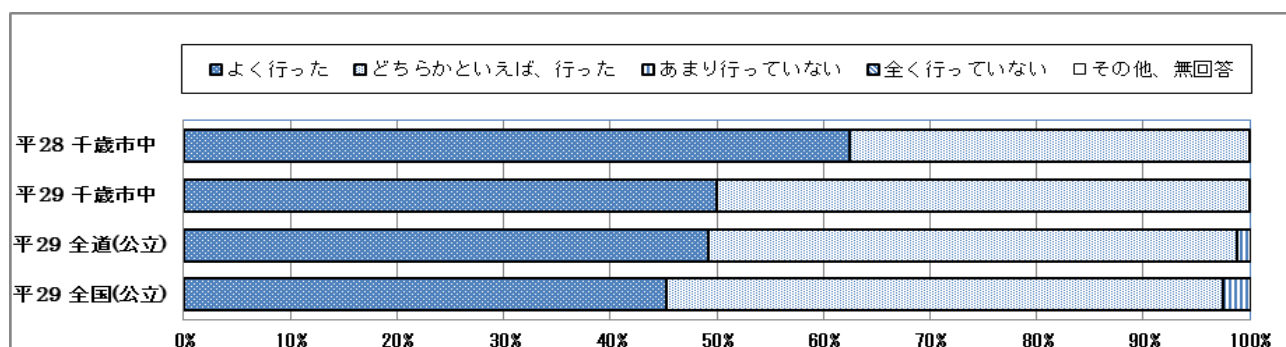
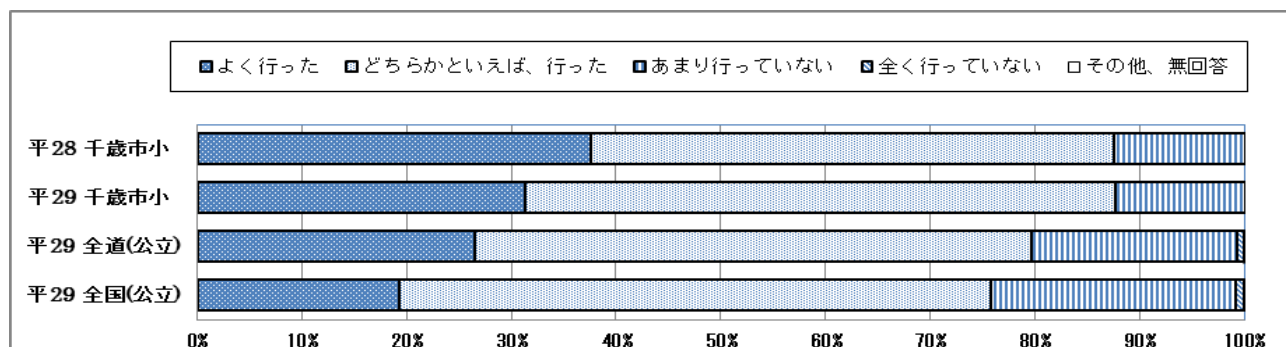
数学の学び方については、「問題の解き方や考え方が分かるようにノートに書いている」と回答した生徒の割合が昨年と同様であったが、「数学の授業で問題の解くとき、もっと簡単に解く方法がないか考える」「数学の授業で公式やきまりを習うとき、その根拠を理解するようにしている」という質問への肯定的な回答の割合は、全国を下回る状態が続いていると共に、その差が広がっており、生徒の主体的な学びに課題を残している。

今後は、数学と実生活を結びつけたり、数学的な活動を積極的に取り入れた授業を工夫したりし、数学に対する関心・意欲・態度をより高める手立てが必要である。

4 生活習慣や学習環境に関する質問紙（学校質問紙）の結果

①キャリア教育

質問番号	質問事項
45	調査対象学年の児童（生徒）に対して、前年度までに、将来就きたい仕事や夢について考えさせる指導をしましたか

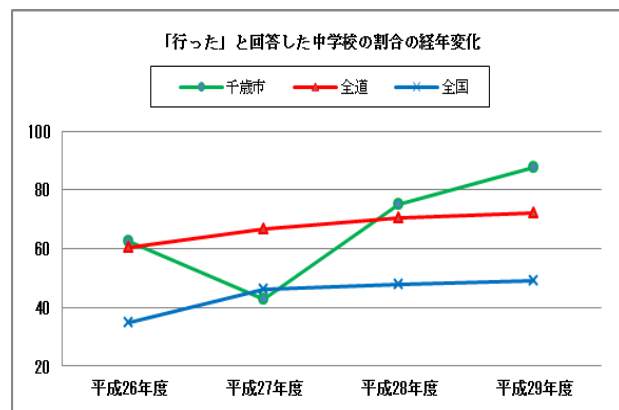
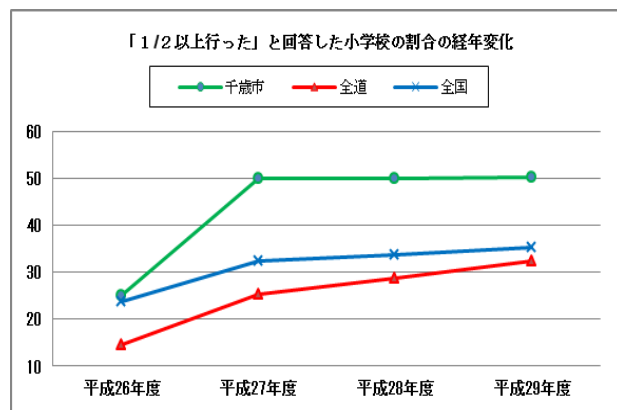
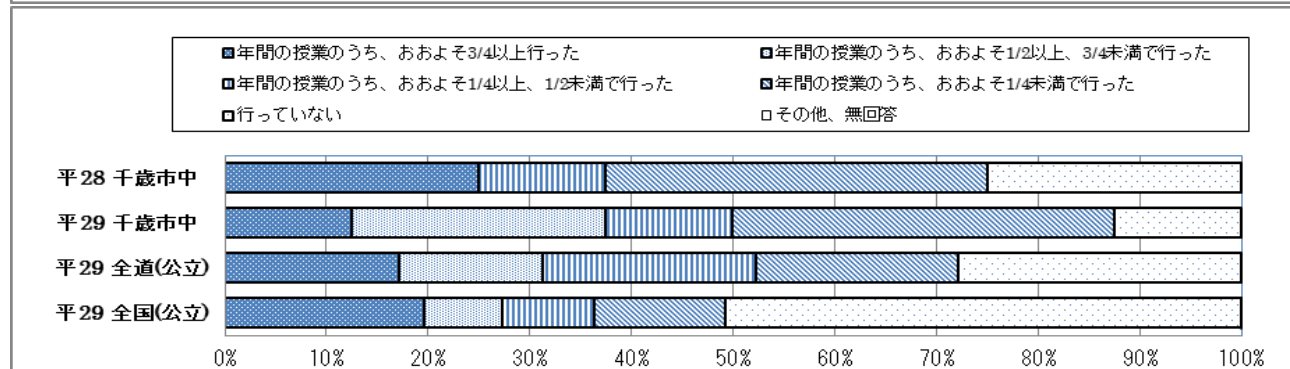
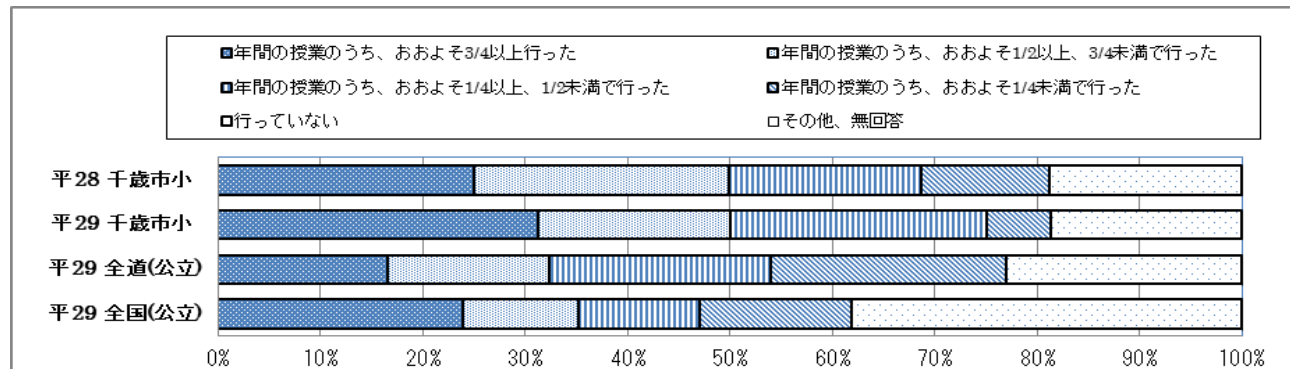


小・中学校ともに全国を上回る取組が行われている。

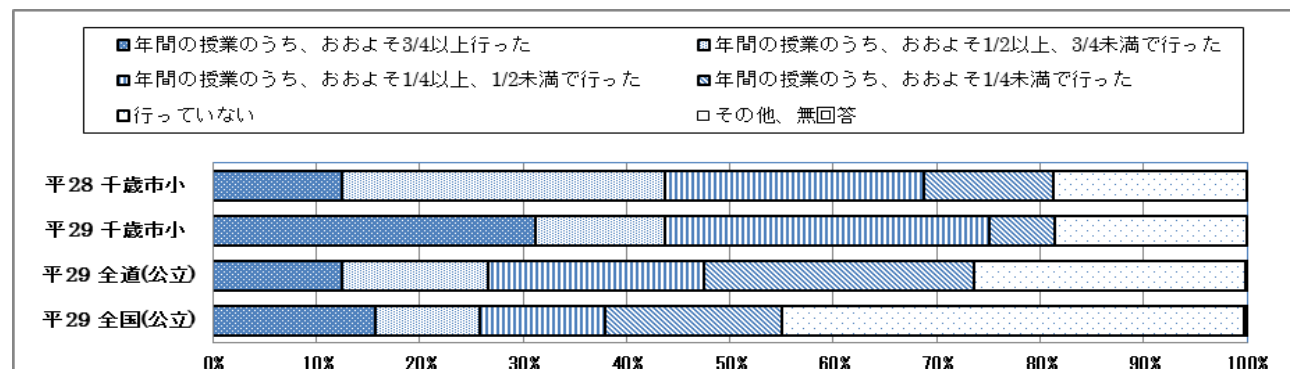
「将来就きたい仕事や夢について考えさせる指導をよく行った」と回答した小学校は、前年度より 6.2 ポイント減少したが「どちらかといえば行った」と回答した学校が 6.3 ポイント増加し、合わせると 87.6 ポイントとなった。中学校は、「よく行った」と回答した学校が前年度より 12.5 ポイント減少したが、「どちらかといえば行った」との回答を合わせると 100%となっている。児童生徒質問紙において「将来の夢や希望をもっている」と回答した児童生徒は、全国を 100 とした指数で小学校においては 100.9 ポイント、中学校では 93.9 ポイントである。夢や希望をもって将来の生き方や生活を考え、前向きに自己の将来を設計する将来設計能力の指導については、引き続き一層の充実を図る必要がある。今後は、各学校において、ボランティア活動や地域人材の活用、職場体験学習等の取組や土曜授業日におけるキャリア教育の推進等とおして、社会への視野を広げ、社会人としての自立を目指す積極的な姿勢を育て、夢や目標をもって学校生活を送らせることが必要である。

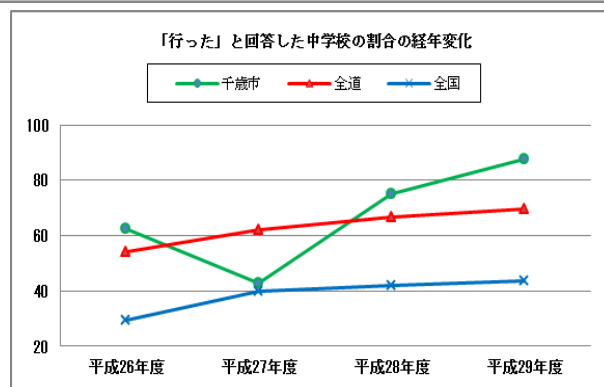
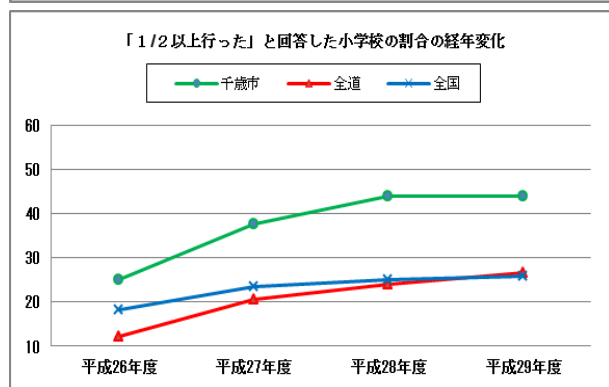
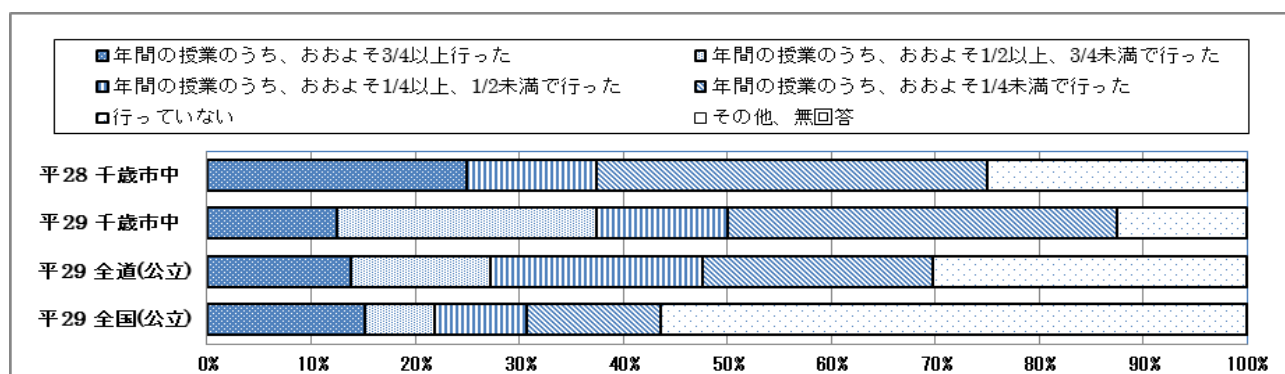
②習熟度別少人数指導

質問番号	質問事項
60	調査対象学年の児童（生徒）に対して、算数（数学）の授業において、前年度に、習熟の遅いグループに対して少人数による指導を行い、習得できるようにしましたか



質問番号	質問事項
61	調査対象学年の児童（生徒）に対して、算数（数学）の授業において、前年度に、習熟の早いグループに対して少人数による指導を行い、発展的な内容を扱いましたか





小・中学校ともに「習熟の遅いグループ」に対しても「習熟の早いグループ」に対しても実施状況が全国を大きく上回る。

小学校においては、「習熟の遅いグループ」「習熟の早いグループ」とともに年間の授業の二分の一以上で習熟度別少人数指導を行っている割合（遅いグループ：千歳市 50%、全国 35.2%）（早いグループ：千歳市 43.8%、全国 25.8%）が全国に比べてかなり高い。特に年間で四分の三以上行っている割合はいずれのグループにおいても 31.3%と、昨年（遅い 25.0%、早い 12.5%）より増加した。4 か年の経年変化においても、習熟の早いグループに対する指導に大幅な上昇が見られ、市の施策として小学校 13 校に配置している「学習支援員」による取組が浸透している様子が窺える。今後も両者に対する積極的な対応が求められる。

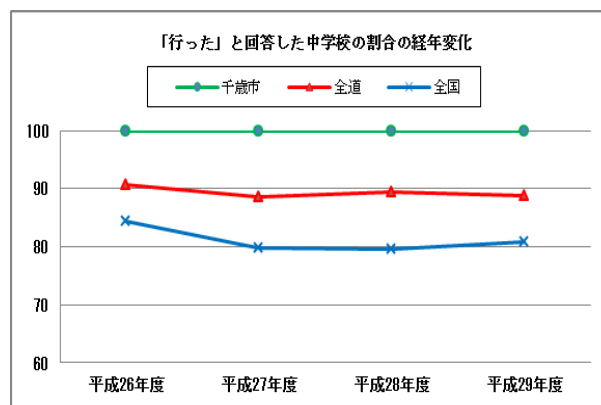
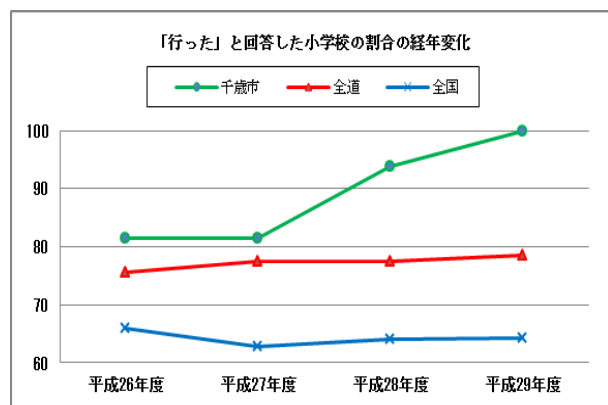
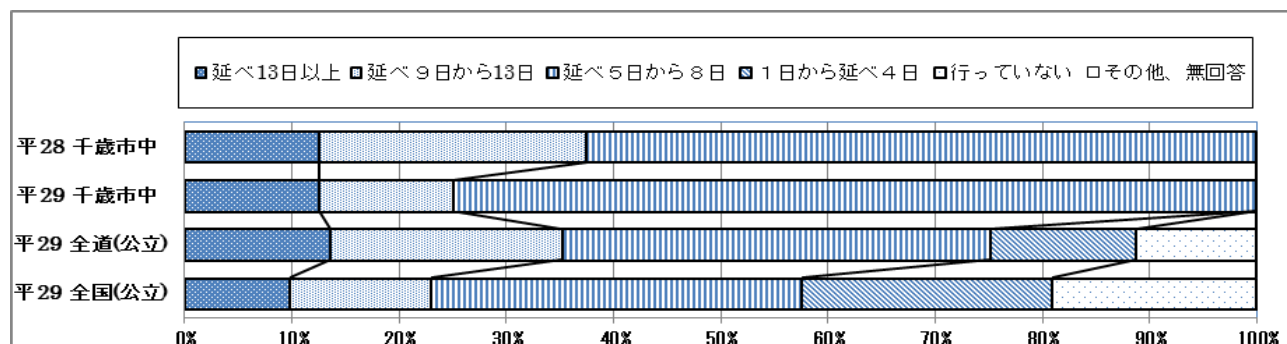
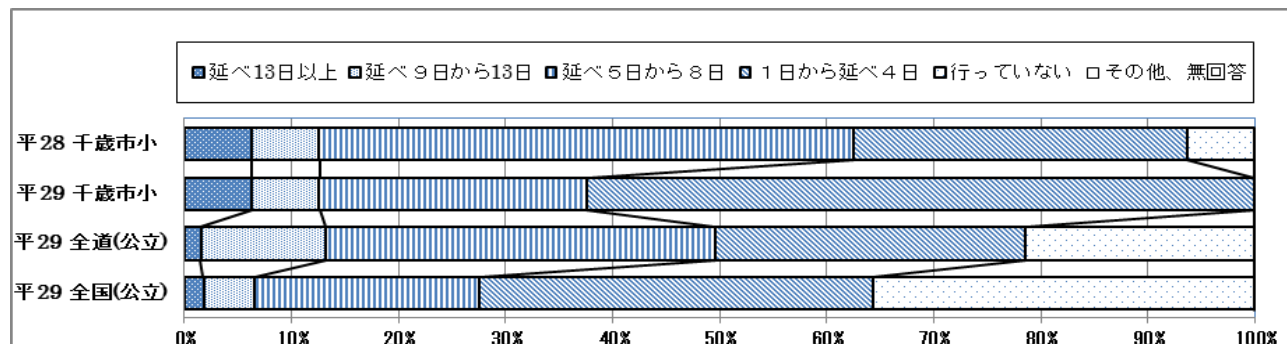
中学校においても、習熟度別少人数指導の実施状況が昨年度より遅いグループ、早いグループともに 12 ポイント増加している。年間で四分の三以上行っている割合（遅い 12.5% 早い 12.5%）は、昨年（遅い 25% 早い 25%）にくらべていずれも 12.5 ポイント減少しているが、二分の一以上行った割合がいずれのグループに対しても 37.5%と昨年よりそれぞれ 12.5 ポイント増加し、全国（遅い 27.3% 早い 21.9%）に比べ、高くなっている。

児童生徒質問紙において「算数・数学が好き」「算数・数学の勉強は大切だと思う」「算数・数学の内容がわかる」と回答した児童生徒が全国を 100 とした指数でそれぞれ、小学校では 101.1 ポイント、102.1 ポイント、97.6 ポイント、中学校では 91.6 ポイント、98.7 ポイント、95.1 ポイントであり、各学校が校内における指導体制の確立や授業後半に習熟度別指導を行うなど具体的な工夫に取り組んできた成果が現れてきている。

今後においても、学校種、学校規模に関わらず、個に応じたきめ細かな学習指導を実施し、特に算数・数学の授業において、習熟に対応した少人数指導を行い、学習内容が習得できるよう、「指導方法の工夫改善による加配」や「学習支援員」の配置などを活用して校内体制を整備し、児童・生徒の習熟の程度に応じた指導の一層の充実を図っていくことが必要である。

③長期休業中の学習サポート

質問番号	質問事項
25	調査対象学年の児童（生徒）に対して、前年度に、長期休業日を利用した補足的な学習サポートを実施しましたか（実施した日数の累計）



小・中学校全ての学校で実施されている。

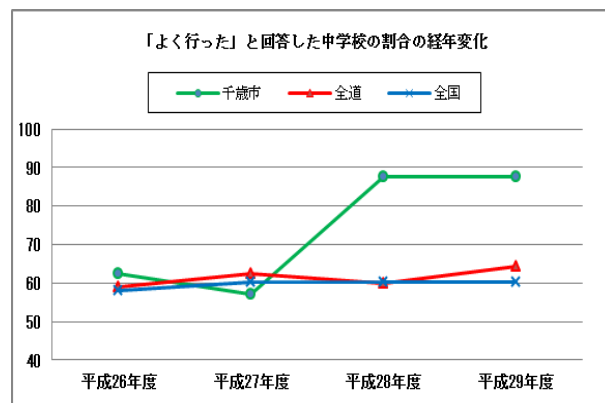
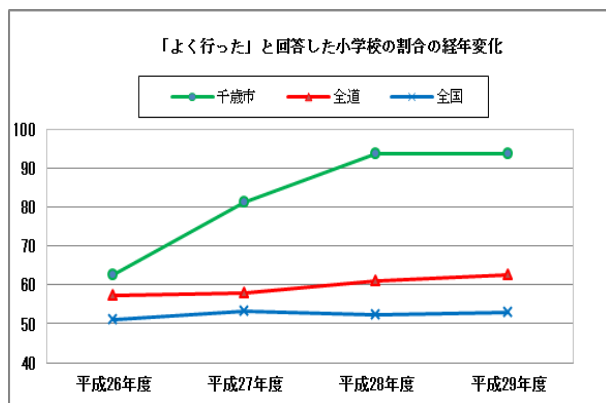
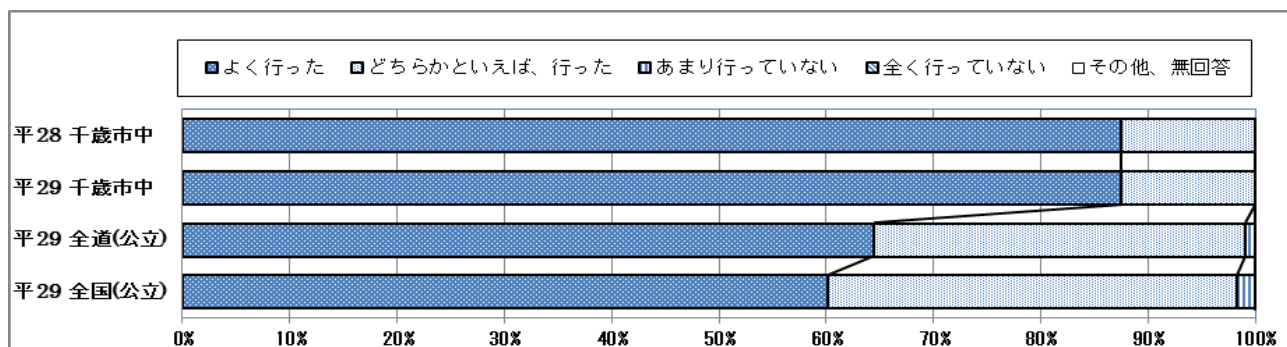
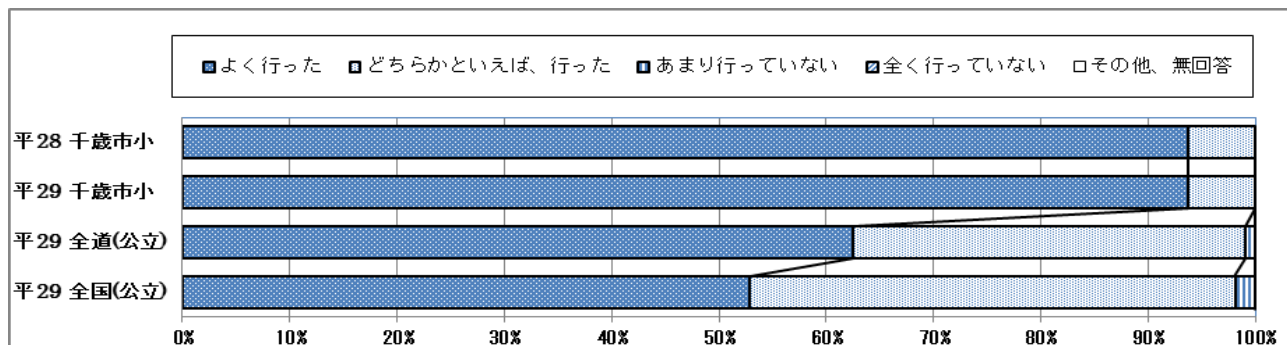
長期休業中の学習サポートを実施している学校は、中学校は昨年同様 100%、小学校においても 6.1 ポイント増加し 100%となった。

長期休業中の補足的な学習サポートについては、子ども一人一人の教育的ニーズに応え、きめ細かな指導の充実を図る観点から、課業日における個別の指導が容易な小規模校を含め、市内小中学校全校において学校の実情に応じた取組が進められている。

今後、長期休業中の補足的な学習のサポート体制については、支援を受けている千歳科学技術大学と、各小・中学校との日程を調整し、実施日数、指導内容、指導体制の充実を図り、補足的な学習はもとより、発展的な学習を含め、長期休業中の学習サポートの質の向上を図る必要がある。

④漢字・語句の指導

質問番号	質問事項
69	調査対象学年の児童（生徒）に対する国語の指導として、前年度までに、漢字・語句など基礎的・基本的な事項を定着させる授業を行いましたか



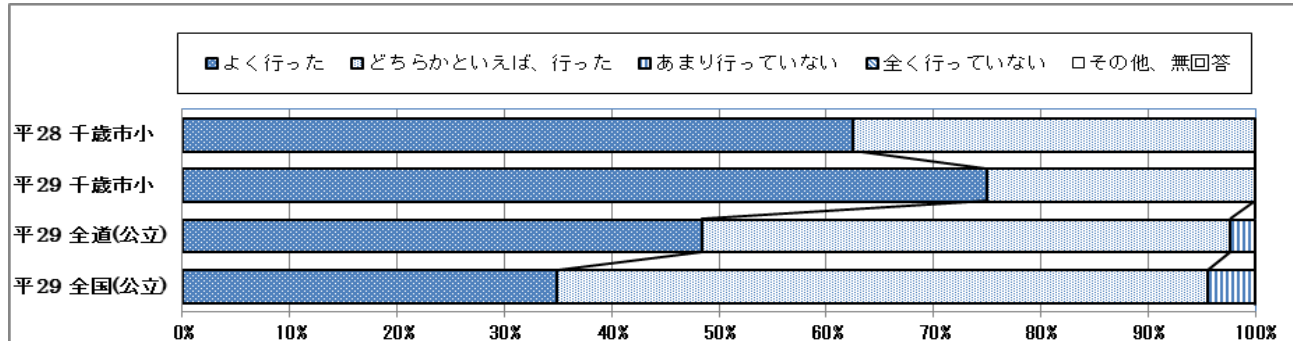
小・中学校ともに積極的な指導が行われている。

「よく行った」と回答した学校は（小 93.8%、中 87.5%）であり、全国（小 52.9%、中 60.2%）と比較しても小・中学校ともに積極的な取組が行われている。引き続き全国学力・学習状況調査の結果を活用して、全国的に定着が不十分な漢字・語句については誤答の分析を基に、正しく理解できるよう指導方法を工夫し、確実に身に付けさせていくことが大切である。

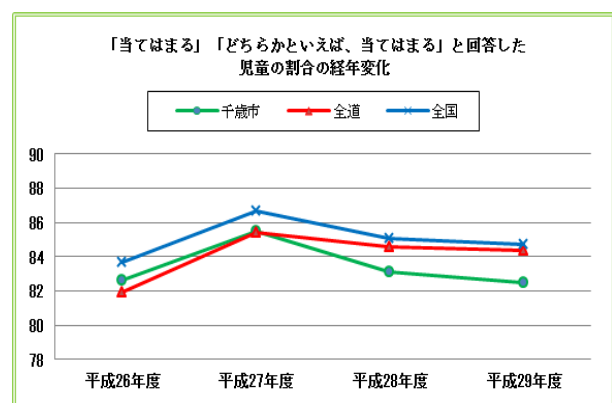
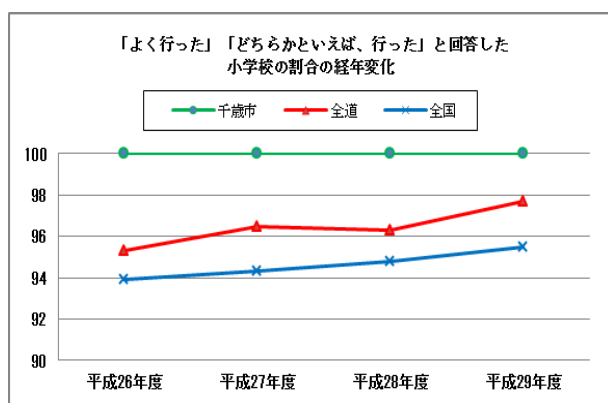
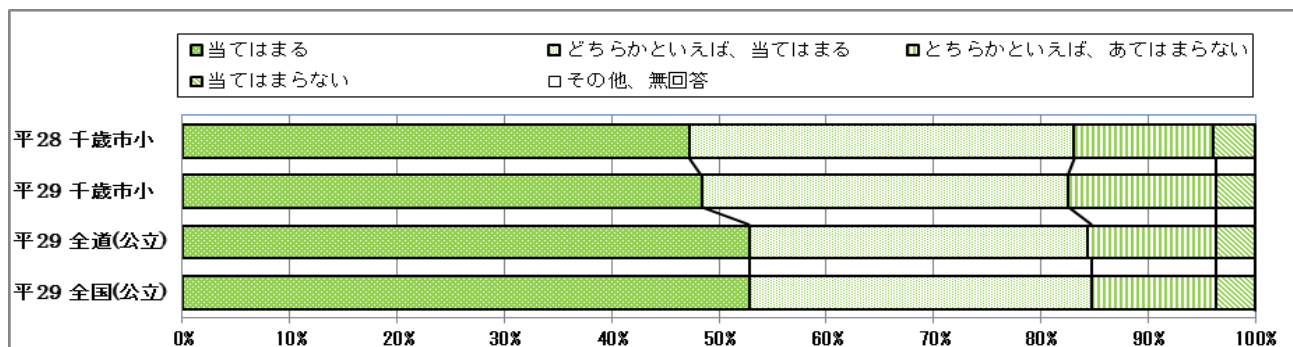
さらに、漢字のもつ意味を考えながら正しく使ったり、同音異義の漢字に注意して使ったりすることができるようにするとともに、国語科以外の学習で使用する漢字をその学年で読み書きできるようにすること、また、全ての教科でノート指導や発表資料作成等で漢字を使用する場面を意図的に設定することが大切である。

⑤授業に対する教師と児童生徒との意識の違い（＊児童・生徒質問紙の回答と比較）

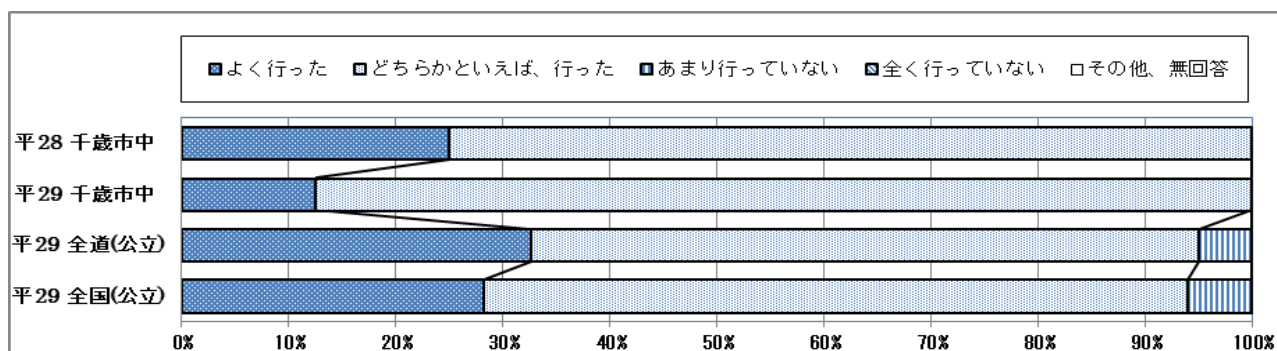
質問番号	質問事項（＊学校質問紙）
36	調査対象学年の児童に対して、前年度までに、様々な考えを引き出したり、思考を深めたりするような発問や指導をしましたか



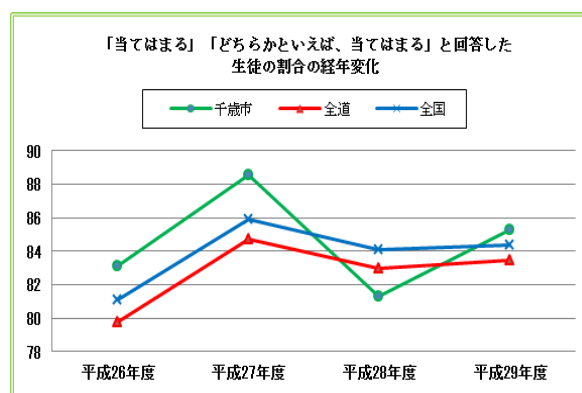
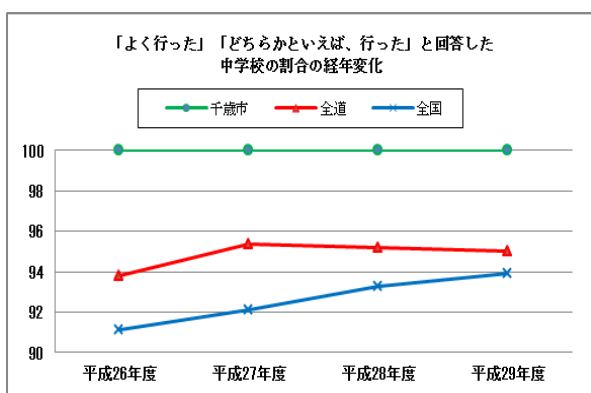
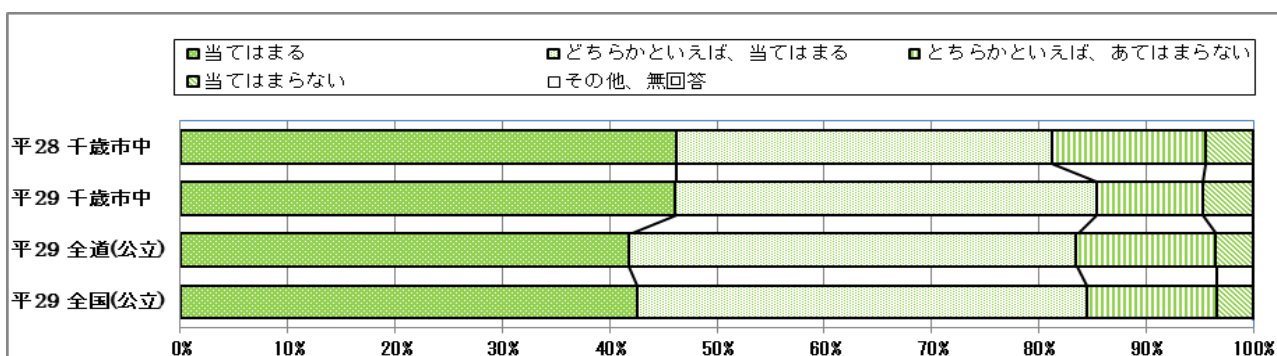
質問番号	質問事項（＊児童質問紙）
56	5年生までに受けた授業では、自分の考えを発表する機会が与えられていたと思いますか



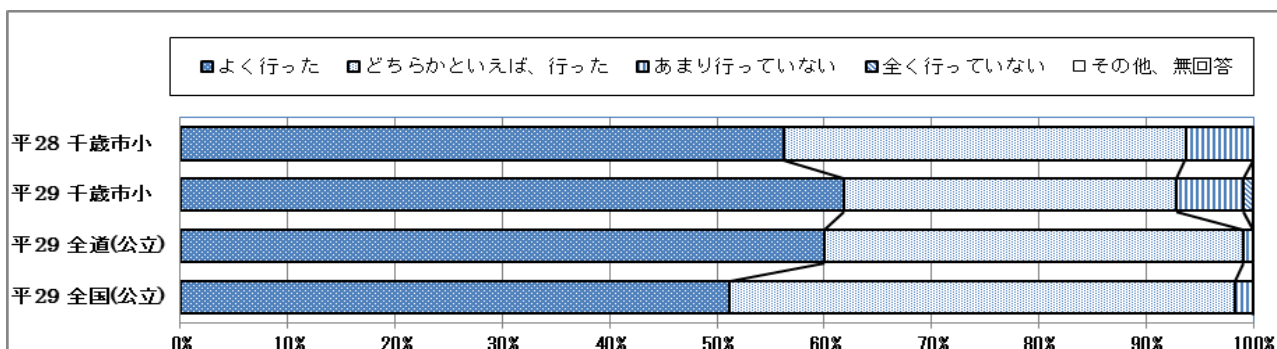
質問番号	質問事項（＊学校質問紙）
39	調査対象学年の生徒に対して、前年度までに、様々な考えを引き出したり、思考を深めたりするような発問や指導をしましたか



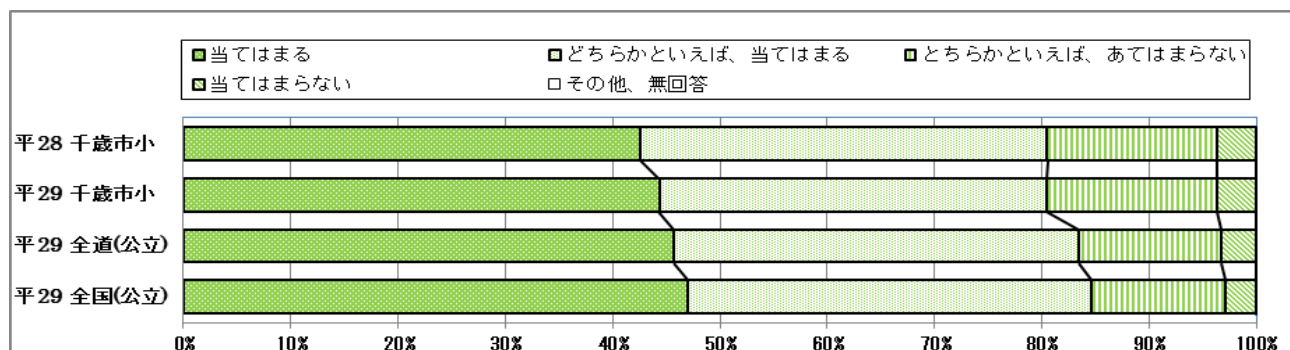
質問番号	質問事項（*生徒質問紙）
58	中学校1，2年生のときに受けた授業では、自分の考えを発表する機会が与えられていたと思いますか



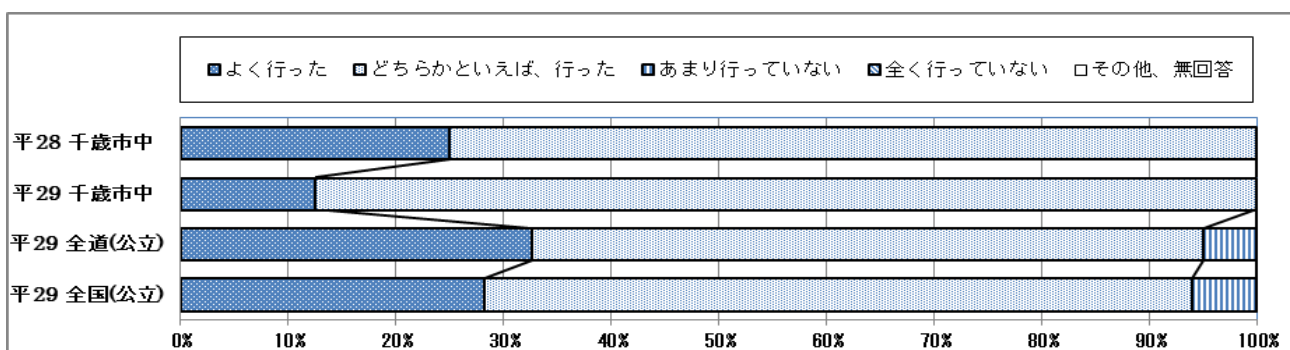
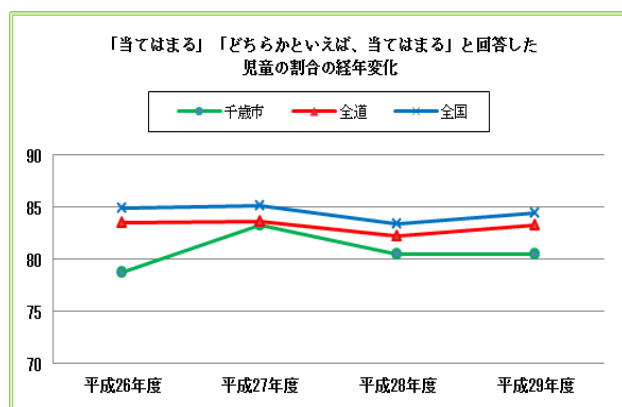
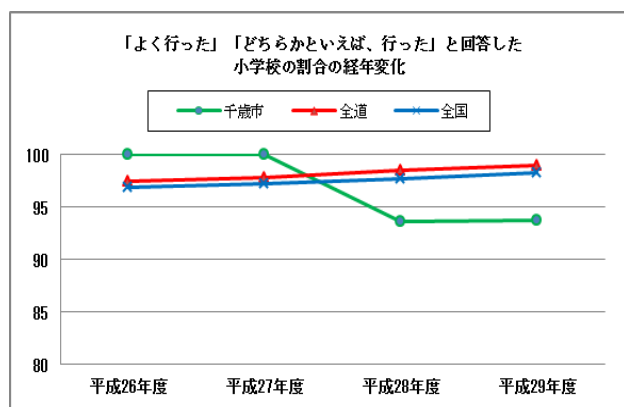
質問番号	質問事項（*学校質問紙）
37	調査対象学年の児童に対して、前年度までに、発言や活動の時間を確保して授業を進めましたか



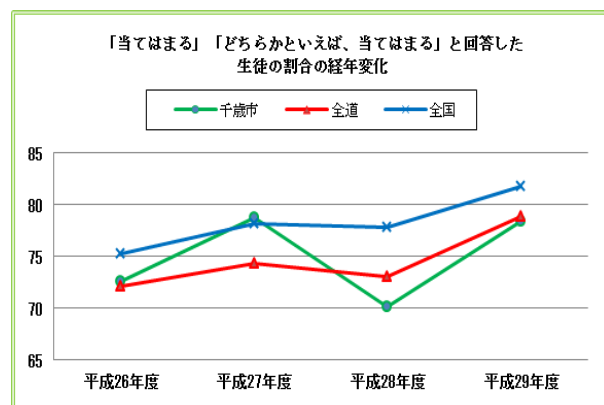
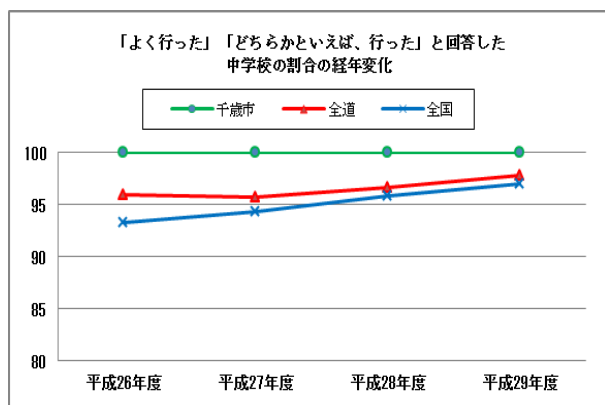
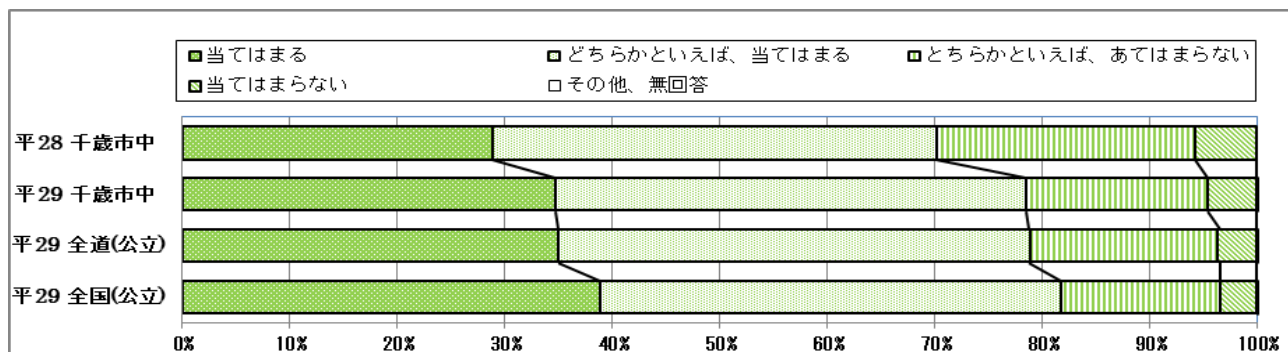
質問番号	質問事項（＊児童質問紙）
５７	５年生までに受けた授業では、学級の友達との間で話し合う活動をよく行っていたと思いますか



質問番号	質問事項（＊学校質問紙）
３７	調査対象学年の生徒に対して、前年度までに、発言や活動の時間を確保して授業を進めましたか



質問番号	質問事項（* 生徒質問紙）
59	中学校1，2年生のときに受けた授業では、学級の生徒との間で話し合う活動をよく行っていたと思いますか



授業に対する教師と児童生徒の意識に依然隔たりがある。

学校質問紙では「児童生徒の様々な考えを引き出したり、思考を深めたりするような発問や指導をしているか」という質問に対して、小・中学校全ての学校が「よく行った」「どちらかといえば、行った」と回答している。一方、児童生徒質問紙では「自分の考えを発表する機会が与えられていたと思うか」との質問に対して、「当てはまる」「どちらかといえば、当てはまる」と回答した小学生は前年度より0.6ポイント減少し82.5%、中学生では4.0ポイント増加し85.3%である。

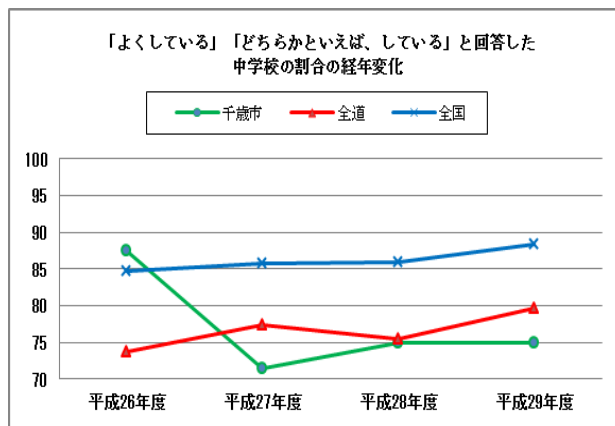
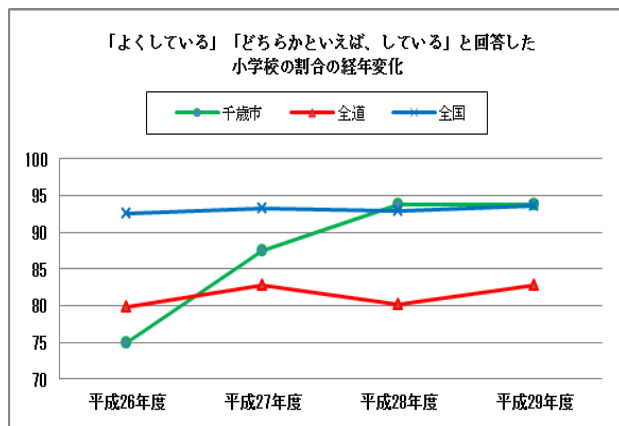
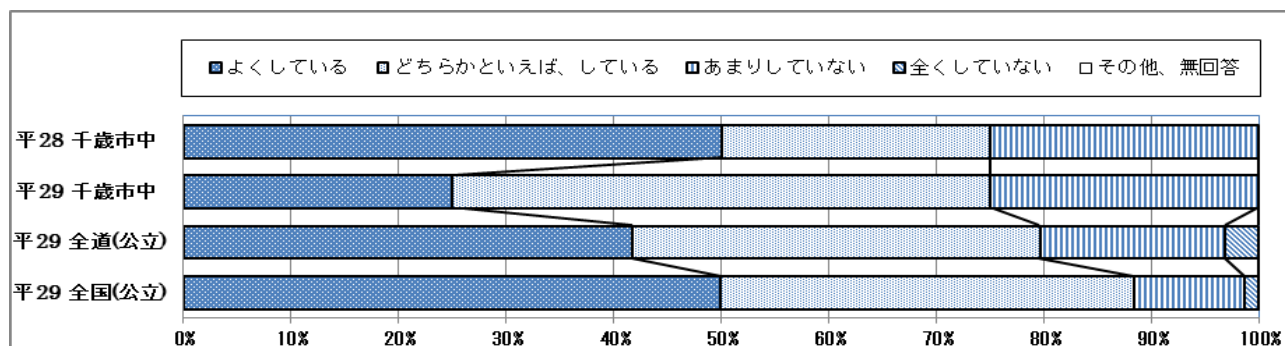
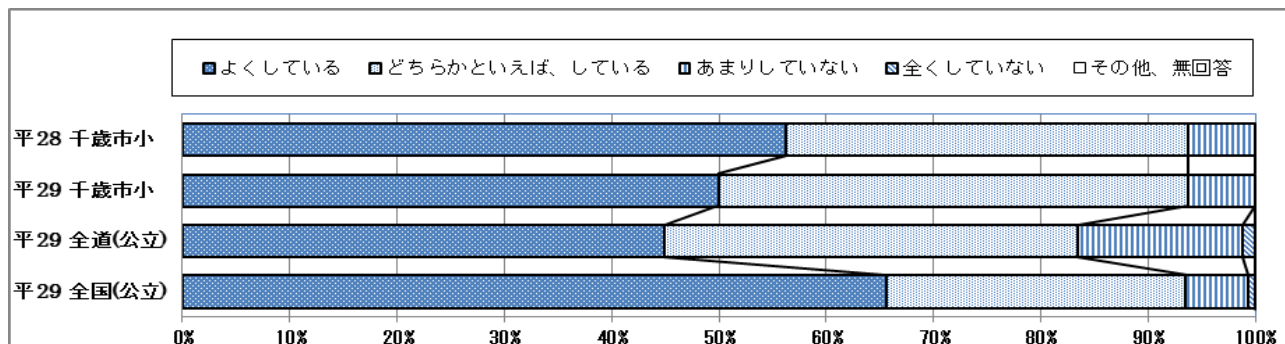
また、学校質問紙では「児童生徒に対して、発言や活動の時間を確保して授業を進めたか」という質問に対して、中学校では全ての学校が「よく行った」「どちらかといえば、行った」と回答しており、小学校では前年同様93.8%である。これと関連する児童生徒質問紙の「授業で、話し合う活動をよく行っていると思うか」という質問に対して、「当てはまる」「どちらかといえば当てはまる」と回答した小学生は前年度同様80.5%であり、中学生では8.4ポイント増加し78.4%である。

教師と指導を受ける児童生徒との意識の差は、小学生では前年度同様、中学生では縮小の傾向が見られるが、依然として隔たりがある。

学校は、自校の状況を的確に分析し、児童生徒による授業評価の実施や評価項目の見直しなど、より一層、子どもの視点に立った授業改善を進めていく必要がある。

⑥講師等を招聘した研修の実施

質問番号	質問事項
小 99 中 97	学校でテーマを決め、講師を招聘するなどの校内研修を行っていますか



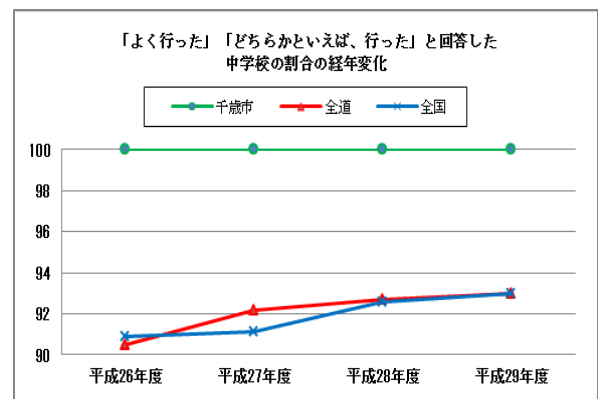
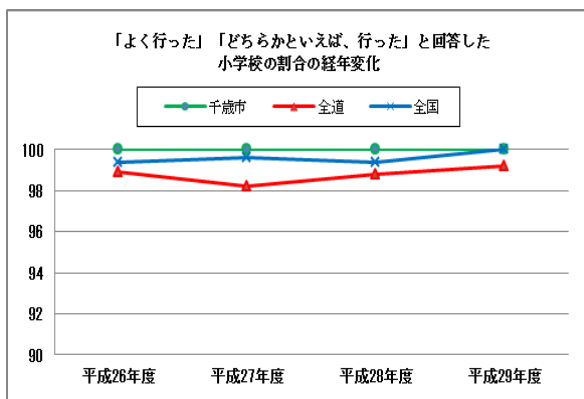
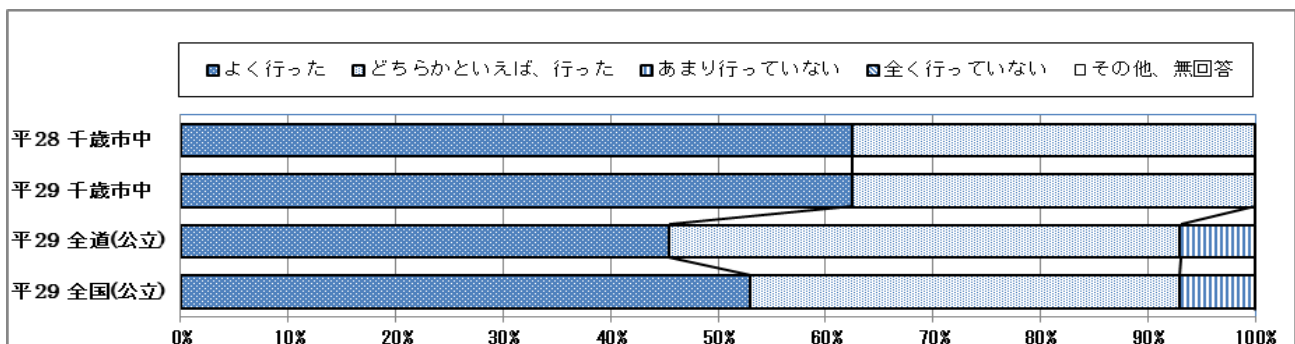
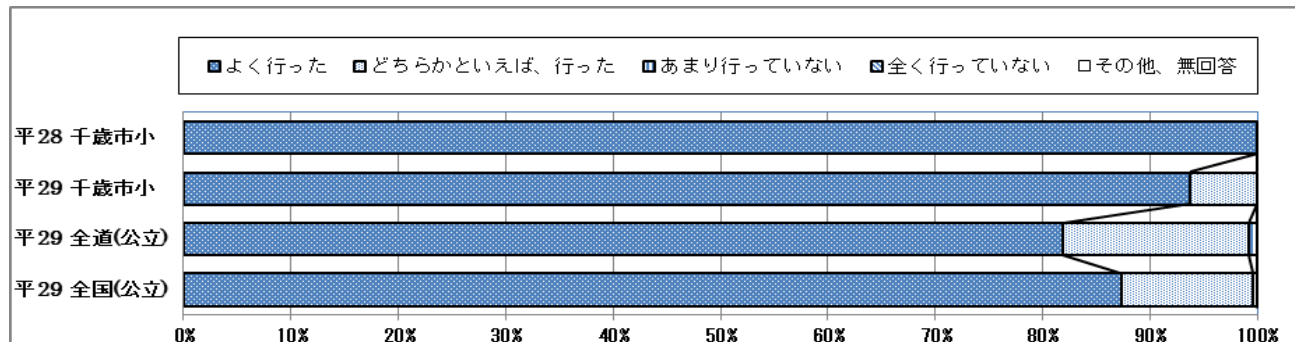
より効果的・効率的な研修が行われている。

小・中学校ともに「よくしている」と回答した学校（小 55.0%、中 25.0%）は前年度（小 56.3%、中 50.0%）より減少し、全国（小 65.7%、中 49.9%）との差も広がった。しかし、教員の研修そのものについては充実が図られている。長期休業中に開催される千歳市教育委員会主催の研修や石狩教育研修センター主催の研修に参加し、個別の学校では招聘できない全国的に著名な講師から直接教示を受けたり、課業期間には少ない時間を有効に活用したミニ研修や授業研究に取り組んだりしており、今日的課題に対応できる能力や授業力向上を目指す研修の充実が図られている。

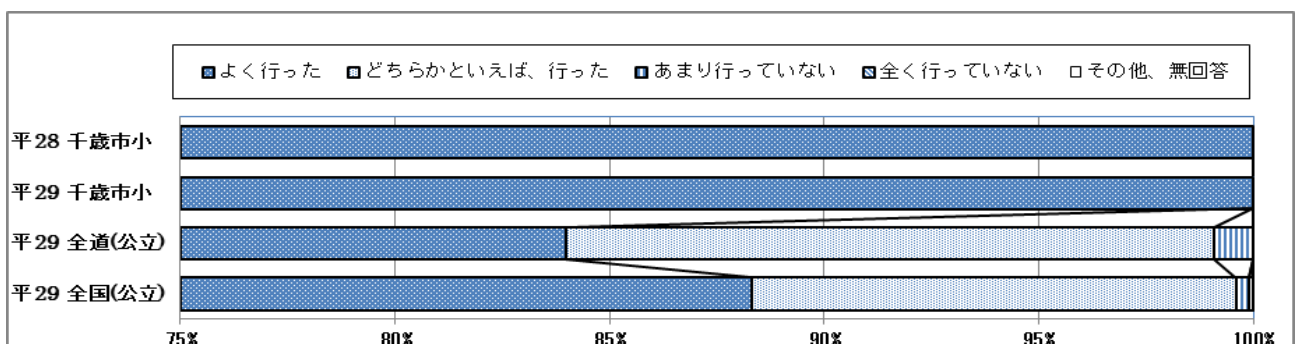
今後更に「学校力向上に関する総合実践事業」や「地域連携研修事業」の推進校における専門家を招いての講演会や実技研修等に参加し自校での研修に還元できるよう校内の研修参加体制の充実を図ったり、研修テーマに精通した市内の実践家や近隣校に在籍する教職員に講師を依頼したりするなど、研修の方法について創意工夫し、教職員の専門性の向上を図っていく必要がある。

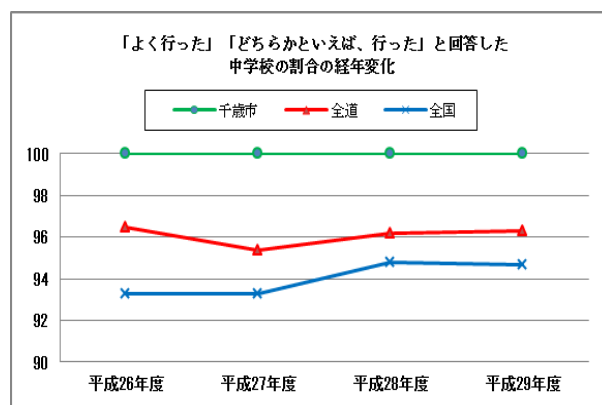
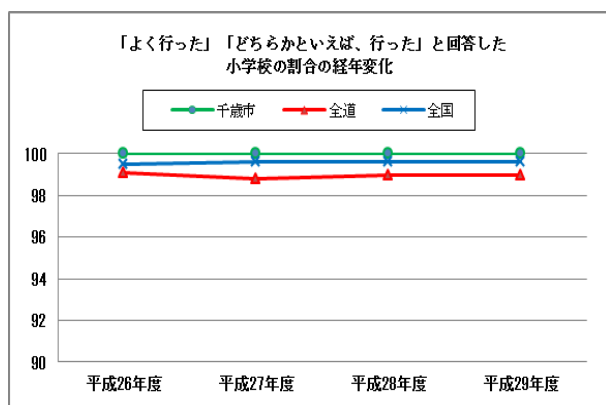
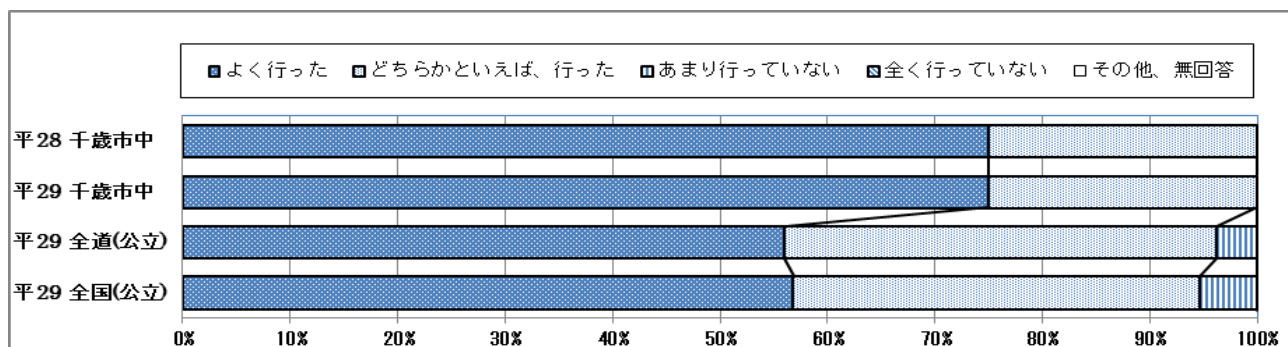
⑦家庭学習（宿題）

質問番号	質問事項
小 9 0 中 8 8	調査対象学年の児童（生徒）に対して、前年度までに、国語の指導として、家庭学習の課題（宿題）を与えましたか



質問番号	質問事項
小 9 2 中 9 0	調査対象学年の児童（生徒）に対して、前年度までに、算数（数学）の指導として、家庭学習の課題（宿題）を与えましたか



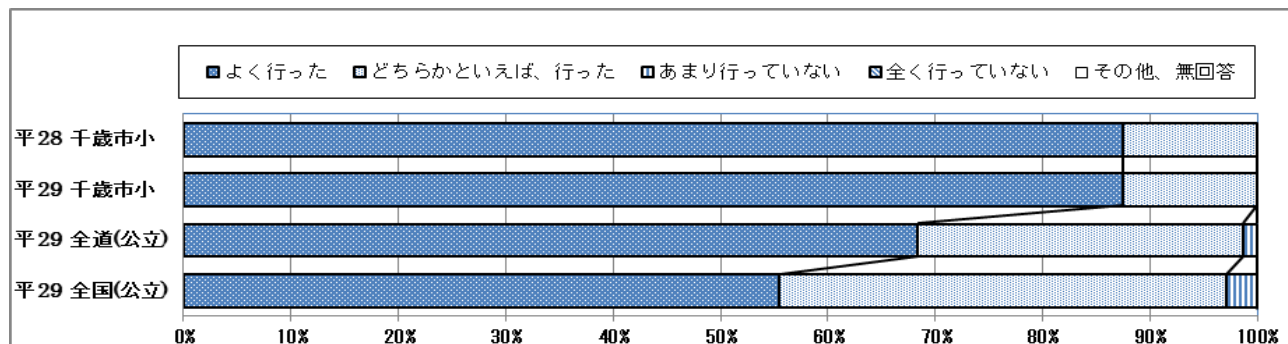


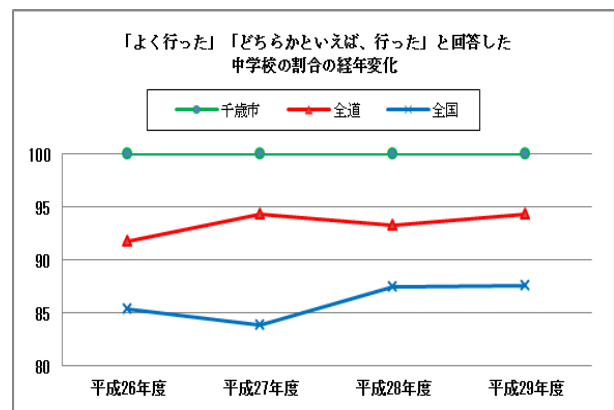
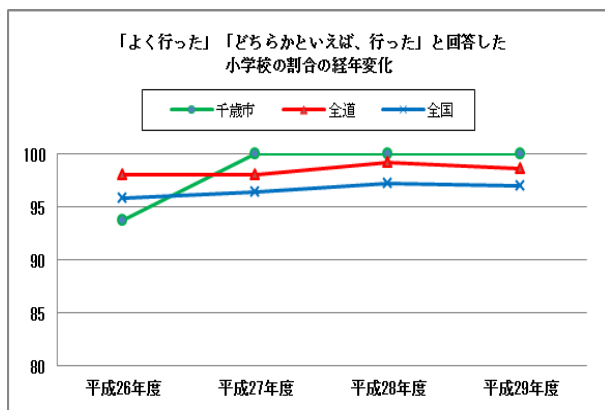
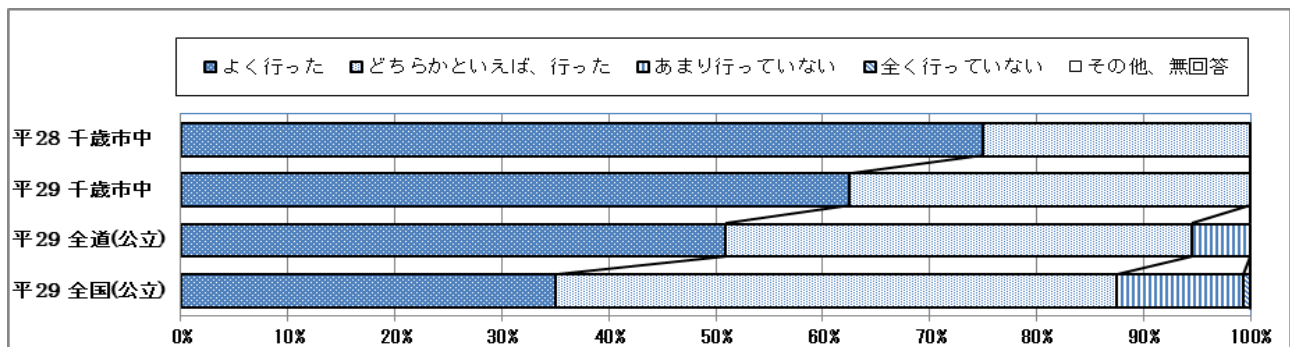
国語、算数（数学）の課題（宿題）を与えている割合は、小・中学校ともに肯定的回答が100%である。

「家庭学習の課題（宿題）を与えたか」という質問に対し、「よく行った」と回答した小学校は国語 93.8%・算数 100%、中学校でも「よく行った」と回答した学校は、国語 62.5%、数学 75.0%であり、全国に比べ、取組が進んでいる。学力向上策の一環として市内全校で取り組んでいる成果として捉えることができる。

児童生徒質問紙による学習習慣の回答からは、小学校においては宿題に取り組む児童は前年度同様、中学校においては宿題の取組は増加しており、全国にくらべても多いが、1週間あたりの学習時間は全国と比べ依然として少ない状況であることから、課題（宿題）の提供に留まらず、自ら計画を立て、主体的に家庭学習に取り組める指導を進める必要がある。

質問番号	質問事項
小94 中92	調査対象学年の児童（生徒）に対して、前年度までに、保護者に対して児童（生徒）の家庭学習を促すような働きかけを行いましたか（国語／算数（数学）共通）



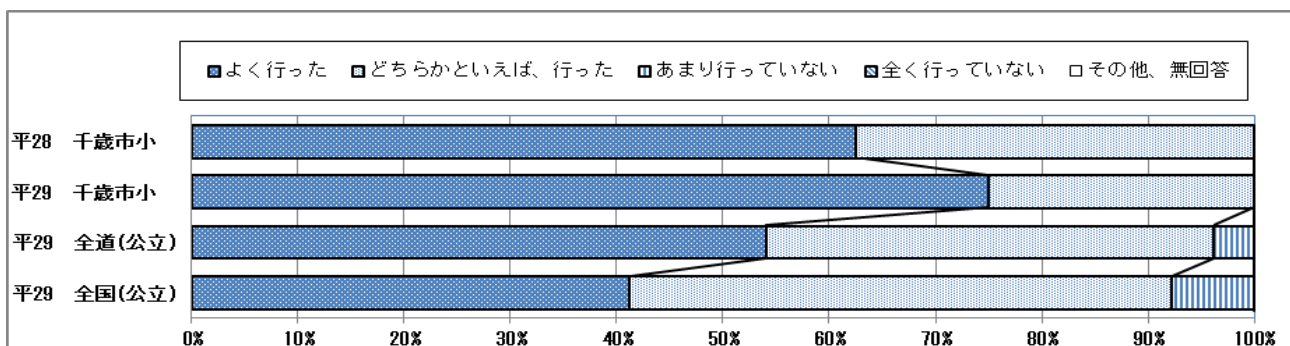


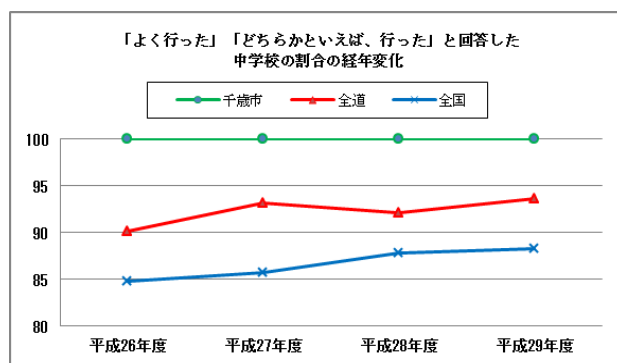
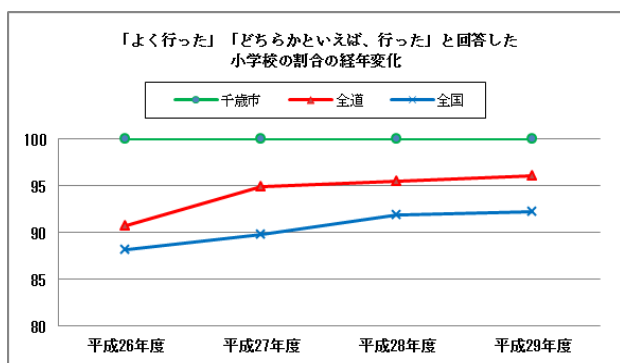
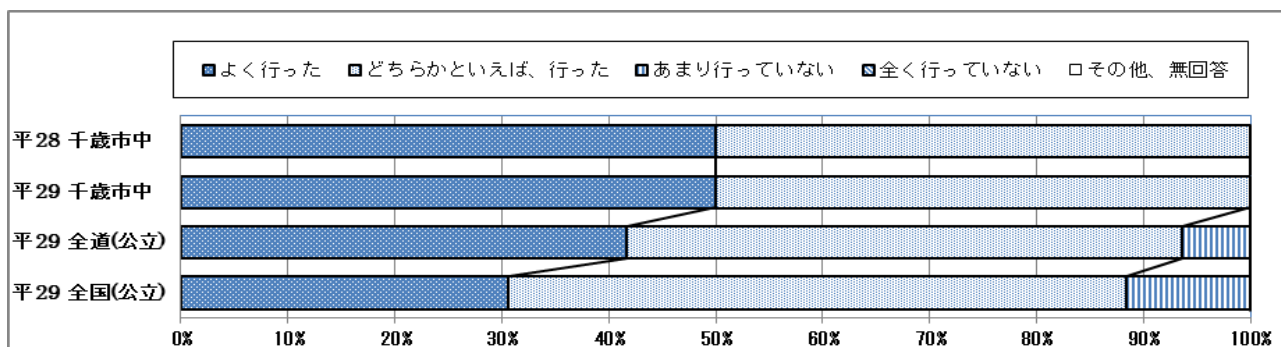
保護者への働きかけは小・中学校ともに「よく行った」「どちらかといえば、行った」合わせて 100% である。

「保護者に対して家庭学習を促す働きかけを行ったか」という質問に対し、「よく行った」と回答した学校は小学校 87.5%、中学校 62.5%となっており、全国（小 55.4%、中 35.0%）と比較すると大きく上回っている。「よく行った」「どちらかといえば、よく行った」と回答した学校を合わせると、小・中学校ともに 100%である。

小中連携のもとに進められている、家庭学習の習慣化の啓発や生活リズムチェックシートに保護者が家庭学習を確認する欄を設けるなどの取組が進んでいると捉えることができる。

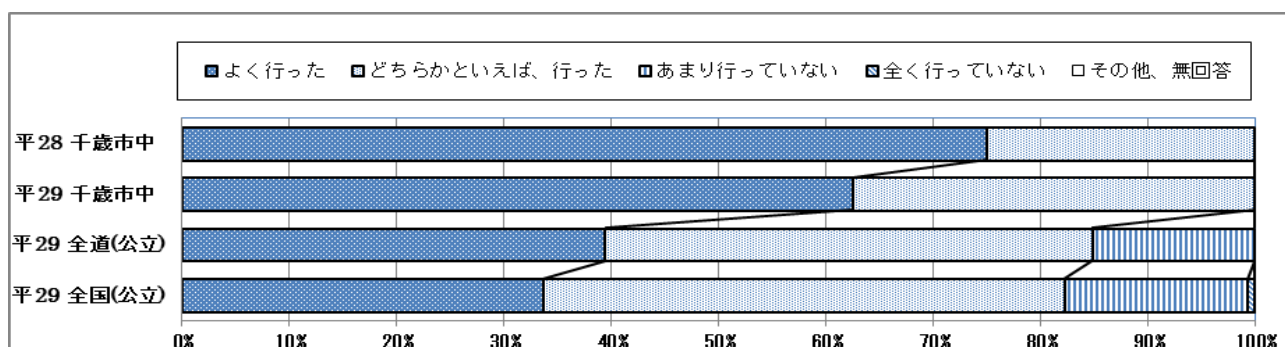
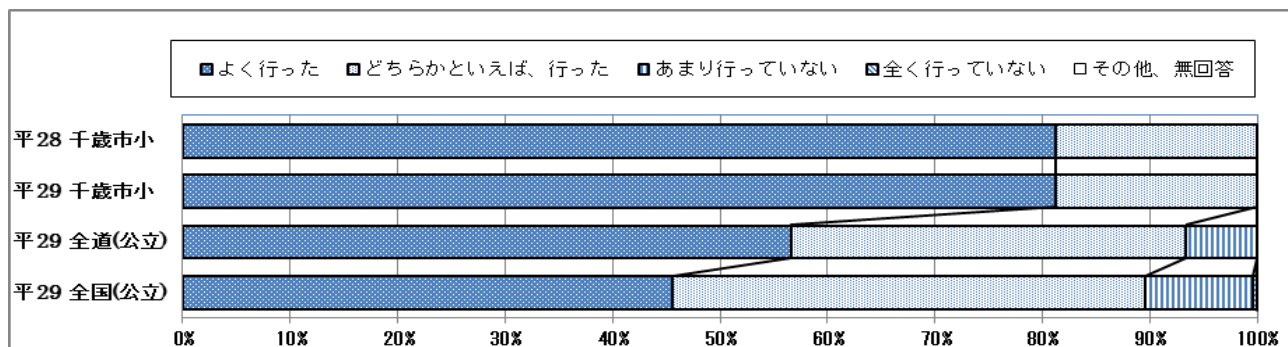
質問番号	質問事項
小 9 7	調査対象学年の児童（生徒）に対して、前年度までに、家庭学習の取組として、児童（生徒）に家庭での学習方法等を具体例を挙げながら教えるようにしましたか（国語／算数（数学）共通）
中 9 5	

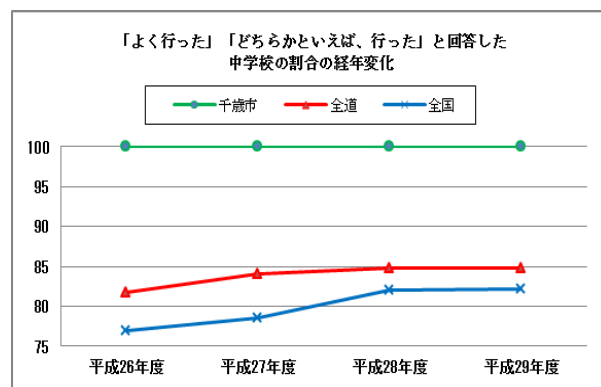
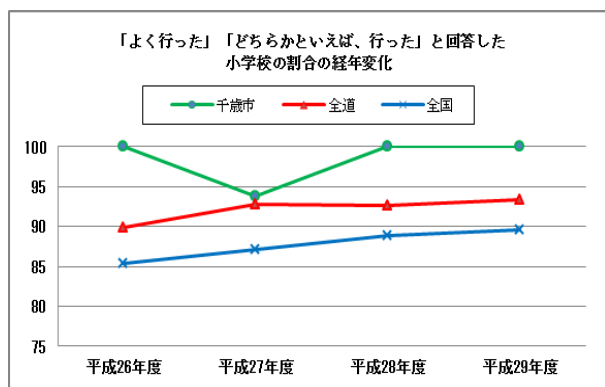




「児童・生徒に対して家庭での学習方法等を具体例を挙げながら教えたか」という質問に対して「よく行った」と回答した小学校は前年度より 12.5 ポイント増加し 75.0%、中学校は前年度同様の 50.0% となっており、全国（小 41.2%、中 30.6%）と比較すると小・中学校ともに上回っている。学校は家庭学習の習慣が身に付くよう、そのきっかけ作りとして宿題を提供しているが、自分で課題を見つけ、課題に取り組む学習の仕方についても、きめ細かな指導が求められる。

質問番号	質問事項
小 9 5 中 9 3	調査対象学年の児童（生徒）に対して、前年度までに、家庭学習の課題の与え方について、校内の教職員で共通理解を図りましたか（国語／算数（数学）共通）

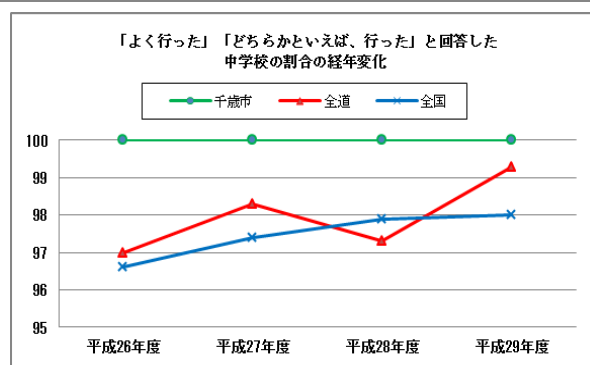
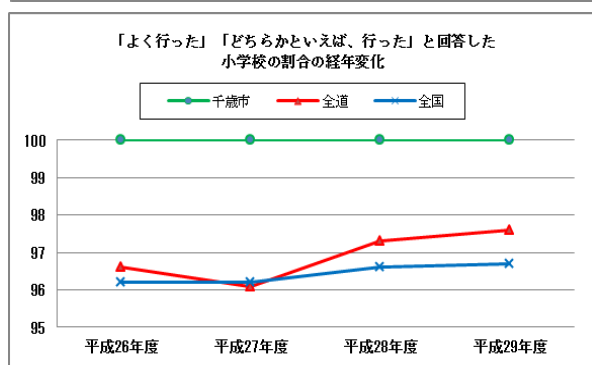
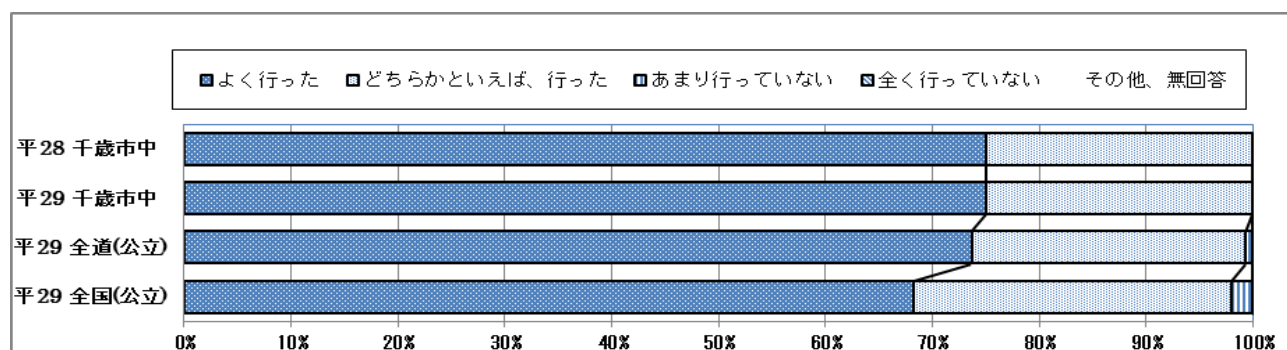
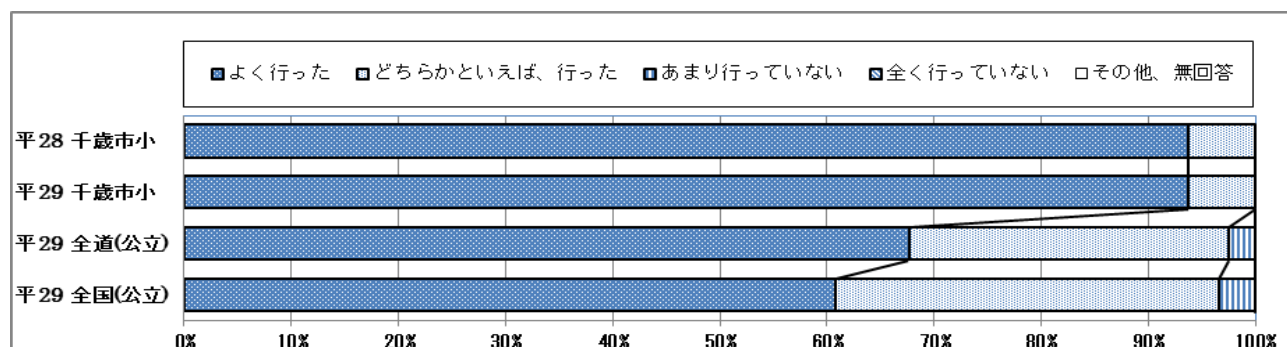




「家庭学習の課題の与え方について、教職員で共通理解を図ったか」という質問について、「よく行った」と回答した学校は小学校 81.3%、中学校は 12.5 ポイント減少し 62.5%となっているが、全国（小 45.6%、中 33.6%）と比較して大きく上回っている。前述の宿題の提供など、市内統一の取組が徹底されているためと考えられる。今後も、学習時間の増加、課題（宿題）内容の充実を図りながら家庭での学習を定着させていくため、校内での共通理解に基づく共同歩調の取組が望まれる。

⑧学習規律

質問番号	質問事項
48	調査対象学年の児童（生徒）に対して、前年度までに、学習規律（私語をしない、話をしている人の方を向いて聞く、聞き手に向かって話をする、授業開始のチャイムを守るなど）の維持を徹底しましたか



小・中学校ともに全国を上回る取組がなされている。

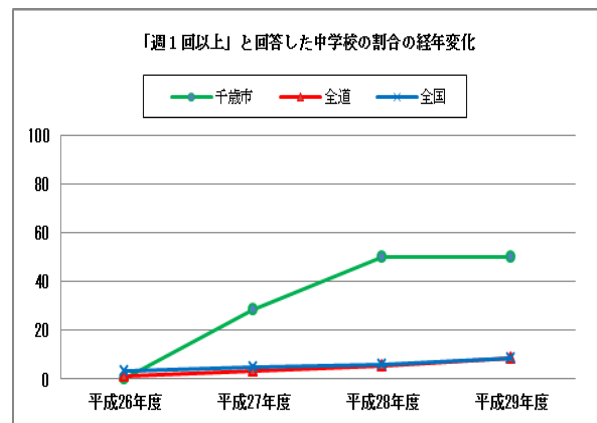
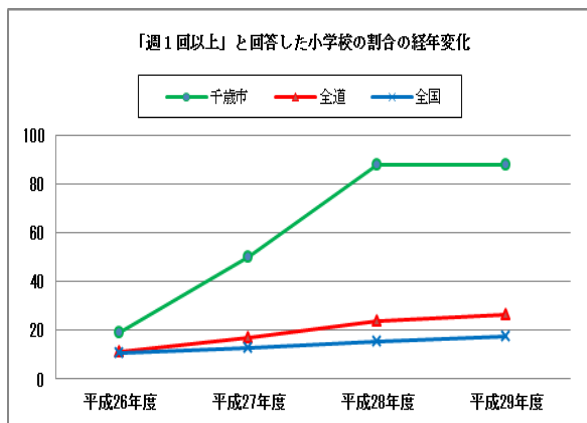
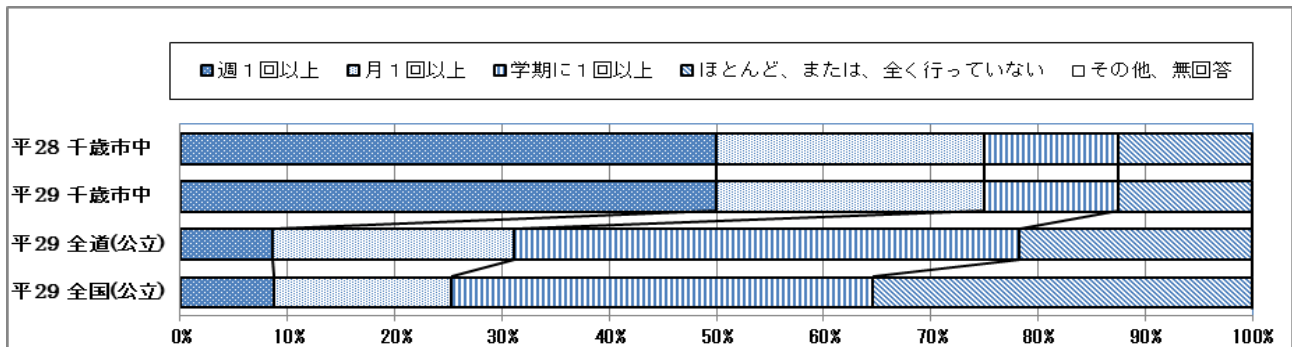
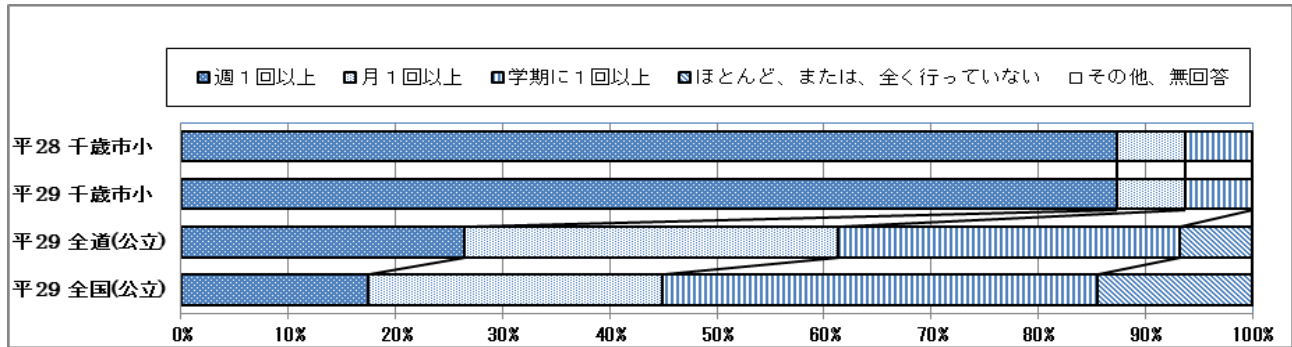
「よく行った」「どちらかといえば、よく行った」と回答した学校を合わせると、小・中学校ともに100%である。

小学校では、「よく行った」と回答した学校が93.8%、中学校では75.0%であり、それぞれ全国（小60.9%、中68.3%）を上回る取組がされている。

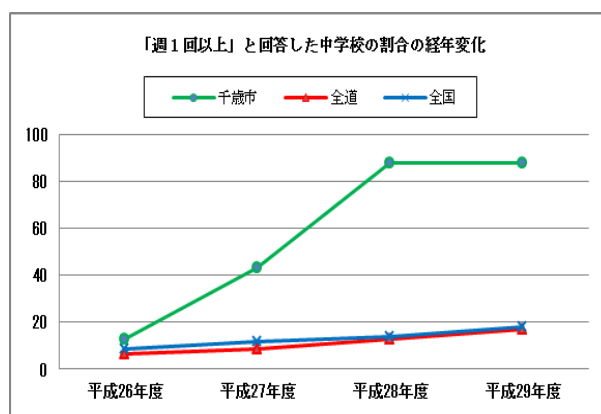
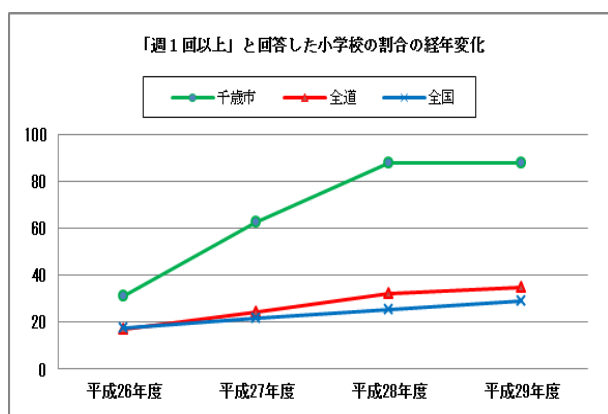
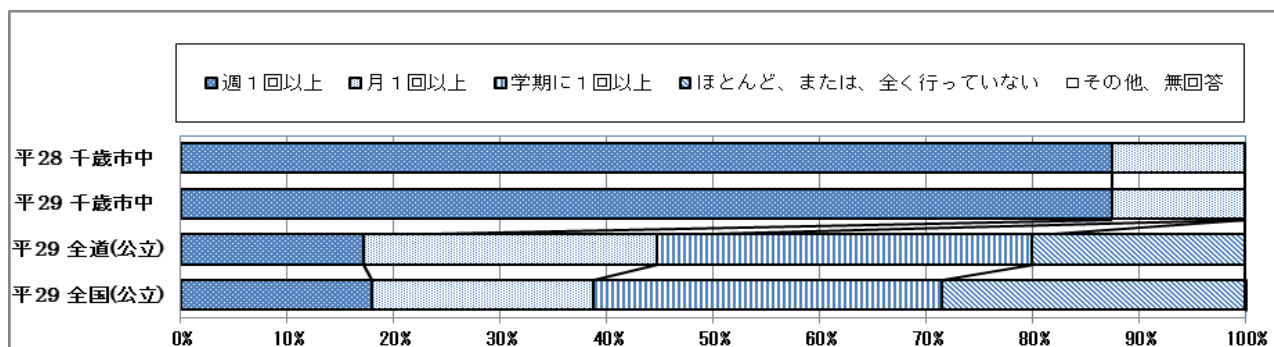
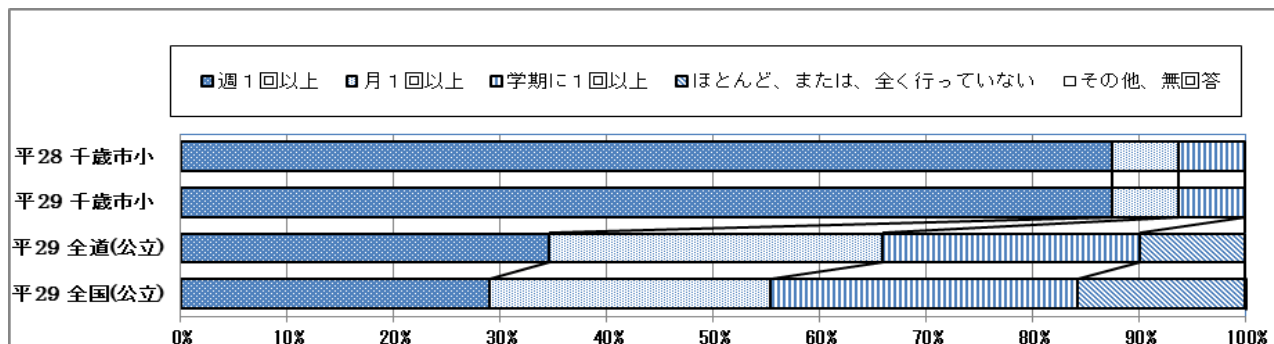
今後も児童生徒に学習のきまりのよさを理解させ、校内で統一した指導を進める必要がある。また、中学校への進学後も基本的な学習規律は共通化されていることが重要であることから、小中連携を意識し、義務教育の9年間を見通した取組となるよう中学校区での一層の連携が大切である。

⑨ ICT機器の活用

質問番号	質問事項
53	調査対象学年の児童（生徒）に対して、前年度に、国語の授業において、コンピューター等の情報通信技術（パソコン（タブレット端末を含む）、電子黒板、実物投影機、プロジェクター、インターネットなどを指す）を活用した授業を行いましたか



質問番号	質問事項
5 4	調査対象学年の児童（生徒）に対して、前年度に、算数（数学）の授業において、コンピューター等の情報通信技術（パソコン（タブレット端末を含む）、電子黒板、実物投影機、プロジェクター、インターネットなどを指す）を活用した授業を行いましたか



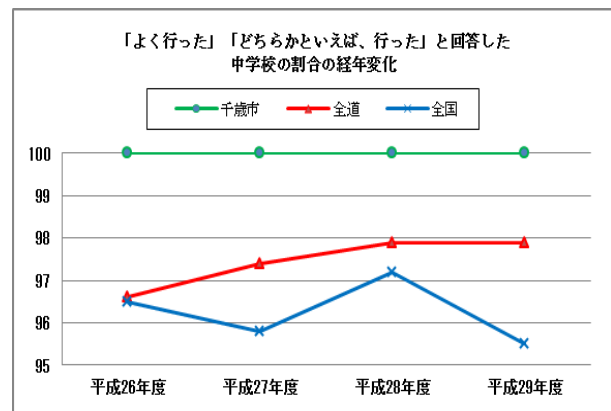
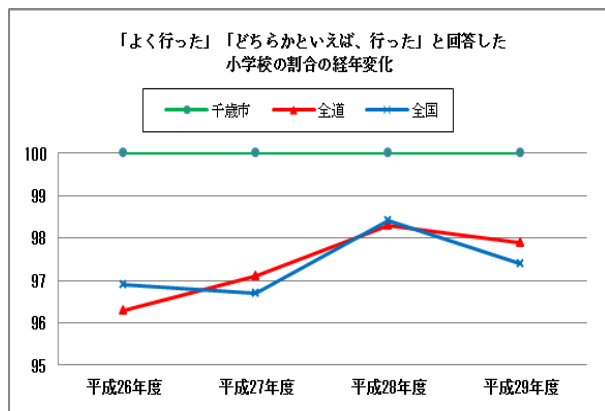
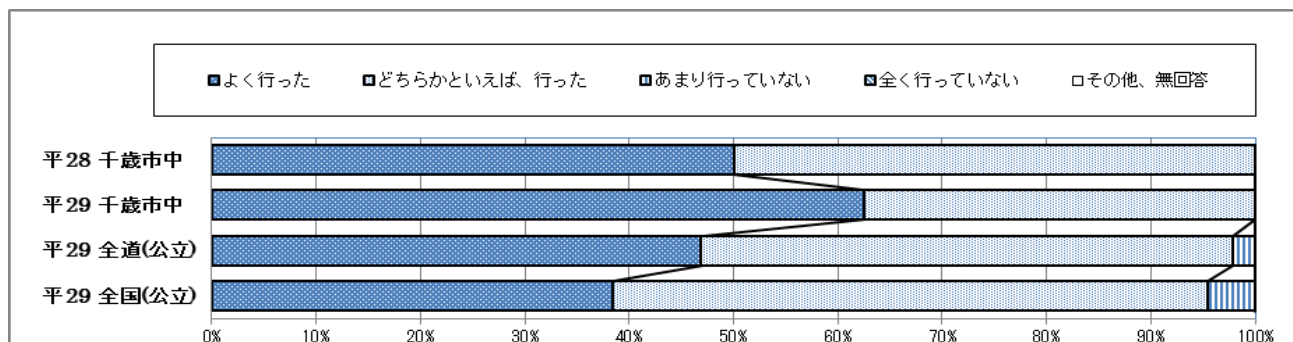
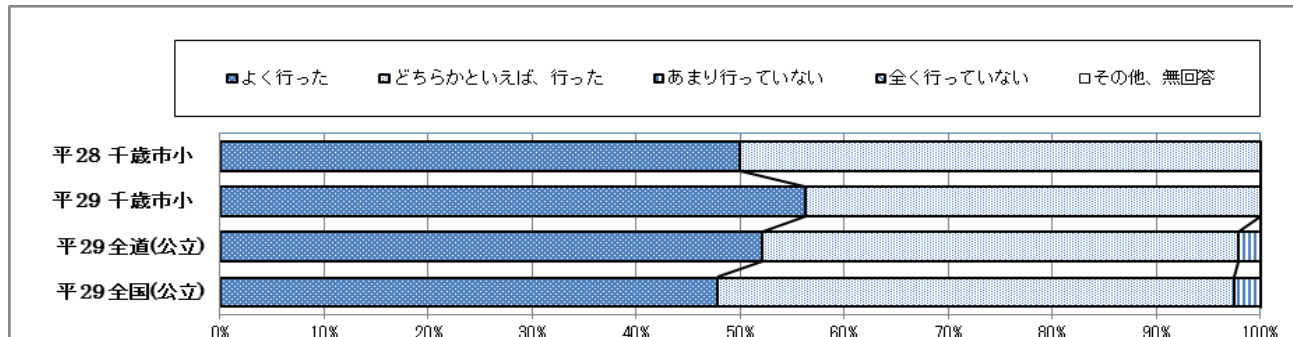
小・中学校ともに全国を大幅に上回っている。

I C T機器は、全ての学校で国語、算数（数学）のみならず他教科でも日常的に授業で活用されており千歳の教育の特徴となっている。全普通教室、さらに学校から要望のあった小学校少人数指導用教室、中学校特別教室、小・中学校特別支援学級教室への電子黒板・実物投影機等の配備に加え、デジタル教科書についても、平成28年度までに小・中学校への配備を終えたことから、今後一層の活用が期待できる。

今後は、授業でのより効果的な活用方法等について校内外での研修を充実させ、授業改善に取り組むことが必要である。

⑩児童生徒のよさの評価

質問番号	質問事項
51	調査対象学年の児童（生徒）に対して、前年度までに、学校生活の中で、児童（生徒）一人一人のよい点や可能性を見付け、児童（生徒）に伝えるなど積極的に評価しましたか。



小・中学校ともに全国を上回っており、肯定的回答が100%である。

「よく行った」との回答が前年度にくらべて小学校においては6.3ポイント、中学校においては12.5ポイント増加し、全国（小 47.7% 中 38.4%）を上回る状況を維持している。しかし、児童生徒質問紙からは、千歳市の子どもたちの自尊感情は年々上昇傾向が見られるものの、依然として全国平均を下回る状況が小・中学校ともに続いている。このような状況から、学校の教育活動全体で行う道徳教育を充実させること、各学校の特色を生かした動植物の世話やボランティア活動など、子ども一人一人の自主的な活動が活発に展開され子どもの活動が見える場を創出すること、学習の成果や子どもの活動の様子等を発信し努力の大切さを認め合う雰囲気醸成を図ることなど、子どもの自己肯定感や自己有用感を高める手だてを工夫し、それぞれの発達段階に応じた児童生徒の積極的な評価を各学校で確実に積み重ねていく必要がある。